

547
79

5 6 7 8 9 270 1 2 3 4 5 6 7 8 9 28

始





チャールズ・ベアード著

直井武夫譯

産業革命講話

東京 白揚社 發兌

大正
15. 1. 9
内交

はしがき

本書はチャールズ・ベアードの小著『産業革命』を翻譯したものである。著者は序文にも云つてゐるように、社會問題の研究に對する、一つの手引きとして、簡単に産業革命の歴史を述べてゐる。

所謂社會問題は現代の社會組織から必然に生れたものであつて、後者を知らずして之を理解することは出来ない。そして近代社會の發生を促がし、これを完成したものは、機械の發明に伴ふ産業革命である。産業革命の進行に連れて、社會は次第に古き封建制度の衣を脱いで、^{見直さねば}今日見るような資本主義制度の諸特徴を顯はして來た。物資の生産と分配に、一國の政治と社會生活に、そして又國際生活に、驚くべき變革が行はれた。現代社會の當面する諸問題は、この變革と共に新らしく生起したものに外ならぬ。だから産業革命の歴史を知ることが、同時に近代社會の成立とその諸特徴を知

ることであり、それに伴つて現れた社會問題の真相に觸れることである。
産業革命が典型的に發展したのはイギリスである。近代社會の誕生と發育とが最も明白に觀取されるのはイギリスである。封建社會から分離して近代社會にまで成熟した變化の過程は、嬰兒が少年になり、少年が青年になり、更に壯年に達するような鮮やかさを示してゐる。だからイギリスの産業革命を學ぶことは、近代社會のすべての問題に觸れることになる。農村の荒廢がある。工場制度と資本主義の勃興がある。人口の増加と都市の發生がある。一方労働階級の結成があり、その反抗がある。工場法があり、労働組合法がある。恐慌があり、失業問題がある。そして民主主義の勝利があり、労働階級の政治運動が現はれる。これらは多かれ少かれ姿を更へて、現に我國にも行はれてゐるのである。例へば我國にも^{現在}労働組合法が現はれようとしてゐるが、紡績業者其他の資本家の猛烈な反對と、同法案の骨抜きとは十九世紀中葉の英國と少しも異らぬ。

本書の第一章には産業革命前のイギリスが描かれてゐる。嵐の前の静かな、呑氣な、平和な社會の有様は、我國維新前の田舎の話聞くようである。第二章には機械の發明が次々に現はれる。産業革命が初まる。それに伴ふ資本主義の勃興と舊封建制度の崩壊とは第三章で取扱はれてゐる。第四章には新らしき資本主義制度に對する反抗と労働階級の諸運動を述べ、最後の章では、現代社會の破綻と將來社會の暗示に觸れてゐる。

私は産業革命を斯程までに分り易く取扱つたものを見ない。多少不滿な點や同意し難き部分もあるが、從來我國で發行された類書はあまり研究的で、一般の人々が手取早く産業革命の概念を捉へるに困難なるを考へると、本書の紹介は強ち無意味でないと思ふ。用語も文體も出来るだけ分り易くしたつもりである。尙ほ本書の出版については山川均氏に負ふ所が多い。こゝに特筆して感謝の意を表する。

大正十四年十二月上旬

譯

者

第二版序

私は本書第二版を出すに當つて、多少の缺陷に氣附かないでもなかつた。しかしこの書は元と、近世社會經濟問題の研究に手を染め様とする人々に、一つの手引きとして、産業革命の輪廓を簡潔に紹介するために書かれたのであつた。してみれば二三の缺點はあらうとも依然としてこの目的は達せられてゐると信ずる。

最後の一章は、本書中最も論議の種を含むものであるが、果して諸方から手厳しい批評を受けた。或方面では私は唯物論者として非難され、他方では、産業問題に對する眞の知識を缺くものとして非難された。

なるほど有褔に暮してゐる人々にとつて、勞賃の値上げ、住宅の改善、一般生活状態勞働状態の向上等に關する凡ての運動を目して、一概に唯物的であるときなすことは容易であらう。最近吾々は貧乏な牧師連が給料の値上げを叫んでゐるのを聞いた。

事實英國の牧師の三分の一が、ロンドン其他の大都市に於ける労働者と同様に、一週間一ギニーそこらで家族を支へなければならぬとすれば、彼等が給料の値上げを要求するのは當然である。かくて『唯物論者』の数は、尠からず増加することゝなる！世には有福に暮してゐながら社會に害毒を流す人々もある。しかし人は先づ生活の安定を得なければ、社會に盡し得ないと云ふことも事實である。若し精神主義的な富裕者が唯物主義の危険は寧ろ安易な生活から生ずる事を悟つたならば、彼等は恐く今日の如くその收入の維持に及々としなからう。又ブリス氏のロンドンの研究、ロントリー氏のヨークの研究は、節儉や節約の御極り文句が何の役にも立たぬことを明らかにした。しかも全世界を所有する階級に取つては、是らの御説教は爲めにこそなれ、少しも危険を感じないのである。

第五章に關する第二の非難は、ミルの引用句、『現代産業界を充たす害悪と不正の最も深き禍根は、競争にあるのではなく、生産機關の所有者が莫大なる不勞利得を取得ると云ふことにある。』に係つてゐる。これについては次の如く辯解しよう。私は第五章に於ては、單に現在の産業社會の解剖を試みたのみで、その害悪の歴史的、經濟的原因を、深く究めようとしたのではなかつた。本書第一版が現れて間もなく刊行されたホブソン氏の『社會問題』は、私をして益々第五章に示した方面の研究が重要なを信せしめた。ホブソン氏がこの方面の研究に對して、明快にして豊富なる寄與をせられたことは、感謝に堪えない。私は現在の害悪が『生産の社會的形態と之に矛盾する所有及び交換の個人主義的形態』とから生ずる事を認める。しかし夫だけには満足しない。この組織は地主、資本家、高利貸に、與へる以上の富を浪費することを高調したのである。今手元に充分な統計はないが、二三の數字をあげて見ても私の言葉が誇大でない事が分るだらう。米國蒸溜會社の副社長エドソン・ブラッドレー氏は、生産者と消費者の間に毎年四千萬弗づつ競争のために浪費されてゐると云つた。斯業の競争者が合同した結果、三百人の得意廻が解雇され、一千万弗の節約が行はれ

た。米國製線製鋼會社が合同した、めに、得意先を『捉まへる』販賣員が二百人解雇された。米國煙草會社の成立によつて三千人の賣子が職を失ひ、大陸煙草會社は一日に三百五十人を解雇したと云はれる。米國販賣員共濟組合の一九〇〇年の報告によれば、獨占とトラストの成立の結果、恐らく三十五萬人の得意廻が失業し、會社は毎日六百萬弗を廣告の收縮と企業の中で節約したであらうと云はれる。米國洗濯機械製造會社は市場の要求に超過する生産を制限するために、不要の人員三十パーセントを解雇した。そして毎年七十五萬弗の生産費を節約し得たと云ふ。製鋼會社のダイト氏は、運輸業の組織と合同によつて會社は年額五十萬圓を節約したと述べた。米國の有力な鐵道會社支配人は、すべての鐵道が一つの中心に集中されたならば、毎年二億の節約が出來ると計算した。エリー教授は云ふ。

『正確な計算は不可能だが米國に最初鐵道が敷れて以來、競争に因つて得た損失は米國民全體に氣持のよい住居を提供し得るほどの額に達するだらう。』と。廣告電信等

によつて米國の鐵道會社が費やす金額は毎年六億九千八百萬弗に達し、英國に於ては三千萬ポンドと註せられてゐる。ロンドンでは物資の分配に必要な商店の数は、現在の二分の一以下で足りる。事業家は競争によつて巨萬の富を浪費し、資本家と労働者は鬭争によつて精力と富とを空費しつゝある。試みに一八九七—一八九八年の一年間に行はれたストライキを延日數に直して見ると、二千五百六十一日に相當する。再びエリー教授の言葉を借りると、『産業恐慌と、之に伴ふ不景氣とによつて、僅か一年間の損失でも數百萬弗に達し、言語に絶した悲惨が數百萬の人々を襲ふ。資本は動かさず労働者は失業する。富の生産は停止し、數千の人々が餓死する。別居、離婚賣淫は驚くべき割合を以つて増加する。これはすべて競争制度の齎らす産業組織の停頓から生ずるのである。』

私は本書の最後に『現代産業組織の無能と虚弱と不整頓の罪は、貧富に關する感情即ち階級的嫉妬とは何らの關係もない』と云つた。それと同時に、現代産業組織を民

主的基礎の上に改造することは、労働階級の政治的運動にかゝつてゐる事を信じて疑はぬ者である。

一九〇二年一月二十二日 マンチエスターにて

チャールス・ベアード

目次

第一章 一七六〇年代(産業革命前)の英吉利

— 農業、製造業、政治等の状態

- 第一節 産業革命とは何であるか……………一
- 第二節 産業革命の機械的方面と社会的方面……………三
- 第三節 一七六〇年代の英吉利……………七
- 第四節 農業の範圍……………九
- 第五節 農業の状態、耕作の制度……………二
- 第六節 農村の生活状態……………一八
- 第七節 農具……………一九

第八節	一七六〇年代の製造品	二〇
第九節	一七六〇年以前の機械の發明	二三
第十節	産業の組織	二四
第十一節	資本主義	二七
第十二節	一七六〇年代の労働者の生活状態	三四
第十三節	運輸制度	三五
第十四節	政治と政府	三六
第十五節	外國貿易	三九
第十六節	結論	四〇
第二章 機械革命と其の經濟的影響		
第一節	前章の概要	四五

第二節	産業革命の要點	四八
第三節	紡績業	四九
第四節	機械の發明	五九
第五節	ワットの發明	六二
第六節	鐵工業	六三
第七節	製靴業、裁縫業、農業	六六
第八節	分配方法の革命	六九
第九節	デューデ・ステュンソン	七一
第十節	汽船の發明	七三
第十一節	發明の內面的歴史	七五
第十二節	産業革命の經濟的方面	七六
第十三節	機械の代用と手の労働	八二

第十四節 農

業

八七

第三章 舊制度の崩壊

第一節 工場制度

九〇

第二節 資本主義の勃興

九五

第三節 資本主義の發展

九〇

第四節 國際資本主義

一〇四

第五節 十九世紀の初めに於ける政治と經濟

一〇七

第六節 新制度の下に於ける労働者の状態

一一四

第七節 人口の増加、新らしい都市

一二三

第八節 進歩と貧乏

一二六

第四章 自由放任主義に對する反抗と新組織の芽生

第一節 労働者の境遇悪化、改善の障害物

一三三

第二節 經濟學者の態度

一三五

第三節 反抗の叫び

一三七

第四節 工場法の制定

一三八

第五節 民主主義の勃興

一四九

第六節 産業民主主義

一五五

第七節 相互扶助

一五六

第八節 労働組合運動

一五九

第九節 協同組合運動

一六一

第十節 結論

一六四

第五章 産業組織の問題

目次終

第一節 産業の發達と社會の混亂……………一七

第二節 經濟學の混亂……………一七

第三節 社會問題解決の共通の基礎……………一七

第四節 人間の生活……………一七

第五節 農業と科學……………一七

第六節 機械の利用と改良……………一八

第七節 産業組織の問題……………一八

第八節 結 論……………一八

産業革命講話

チャールス・ベアード著

新井友三譯



第一章

一七六〇年代(産業革命前)の英吉利

農業、製造業、政治等の状態。

第一節 産業革命とは何であるか。

産業革命とは産業の歴史の上につた一大變革である。

人間は食べたり着たりする欲望を持つてゐる。この欲望を満足さすためには、働か

ねばならぬ。人間はそのため、昔から道具を使つたり、器械を應用したり、自然力を利用したりして働いた。しかし時代が進むに従つて器械も改良され、人間の働き方も變つて來た。その變遷の跡が産業の歴史である。

① それでは産業革命は、何時ごろ起つたものであるか。これは過去百五十年の間に起つた一大變化を指すのである。この間に色々な發明や發見が行はれて、生活必需品の生産と分配の方法がすつかり變つてしまつた。そして此の變化に従つて、社會の經濟上の作用もすつかり一變したのである。

① 人間は長い間、自分の手だけで働いてゐた。粗末な道具を持つてはゐたが、それでも食べたり着たりする物を得るだけが、容易なことではなかつた。人はやつとこゝまで、僅かなものを、自然からもぎ取り得るに過ぎなかつた。彼は一生懸命に、自然の盲目な力と戰つて來た。自然の盲目な力の前には、人間は憐れな犠牲であつた。山火事には焼かれ、洪水には流される。雷には打たれるし、寒い嵐には凍えてしまふ。悪疫は

勝手に流行し、饑饉は澤山の人を倒すと云ふ風であつた。だから初めは自然の暴威を防ぐだけが、人間の仕事であつた。夫から少し進んで、木の片れを尖らしたり、燧石を磨いたりする様になつた。これがそも／＼産業史の初まりであつた。それから幾萬年を経てやつと十八世紀に差し掛つた。この時に、人間は今まで戰つて來た自然力を使つて、自分の仕事をさせることを發見した。之が機械の發明だ。蒸氣力や電力の發見だ。紡績機械や蒸氣汽罐の發明だ。之に較べると、十八世紀までの人間の發明や科學の進歩は極く僅かなものであつた。それは十八世紀以來、今日に到る百五十年足らずの間に起つた、素晴らしい進歩に比べると、物の數でもないのである。そしてこの最近百五十年間の大變化が産業革命なのである。

② 第二節 産業革命の機械的方面と社會的方面

② 産業革命には二つの方面がある。一つは物質的な方面で、物品の製造に關した事柄

であり、今一つは社會的方面で、それが人間の性質を變へた點である。人間は境遇によつて變るものだ。生活の資料をどんな方法で生産するかと云ふこと、即ちその仕事や仕事のやり方と云ふものは、人の性格を決める上に、非常な大きい影響を與へるものである。

成るほど産業革命によつて、生活資料の生産は一足飛びに進歩した。人類は有りつたけの力を絞り出さないでも、樂に衣食の資料を作り出すことが出来る様になつた。然し働きや生活のやり方が急に變つてしまつたので、人々は茫然として、あつげに取られてしまつた。そしてみんなが均しく新らしい發明の恩恵を蒙るようになり、世の中を組み立てて行く事が出来なかつたのである。

産業革命によつて工場制度が生れた。交通の機關は整つて、非常に往來がた易くなつた。この二つの出來事によつて、社會には非常に驚くべき變化が起つた。長時間の労働、過度の労働、狭い所に餘り大勢の人を詰め込むなど、色々な善くない事が起つ

た。例へば一つの工場が建つと、數千の職工が此の工場に集つて来る。その家族が工場のごろりに集まる。そして急に工場町が出來上る。さういふ町に限つて、一般の施設が不完全だ。衛生状態は非常に悪く職工の住居だつて汚ない小屋に過ぎない。まるで人間らしい生活はないのである。

かうして人々は、急に新らしい社會に引きづり込まれた。そこでは舊時代の仕來たりや掟や道德はすつかり役に立たなくなつた。そんなものは皆新らしいやり方に當てはまらないので、腐つて行く外はなかつた。古い經濟組織や生活の基礎は根底からぐらついで、何も彼も混亂してしまつた。『物事が分らなくなり世界は碎けて』しまつたのである。そして人々は、新らしい状態に自分を當てはめて行く事がすつかり駄目な様に思はれた。新らしく生れて來た社會の事情を征服し支配して、之に打ち克つことが出來ない様に見えた。それは丁度彼等の先祖が、山火事や大水等の自然力をどうする事も出來かつたと同様であつた。

この産業上の大變化が起り、舊い社會が壞れて行く間、人々はまるで麻痺してしまつた様になつた。經濟學者や、道學先生や、社會の先覺者などは、暗の中を手探りする様に、迷ふてしまつた。今まで人間は偉いもの、ように思はれてゐた。人は神の子であつて、自由と愛と尊嚴とを持つてゐた。ところが其の人間が急に一つの機械になつてしまつたのだ。工場に雇はれた労働者は物品の製造者にすぎず、また賣つたり買はれたりする商品と異なるところのないものとなつた。品性だとか、愛だとか、喜びだとか、賞讃だとか、自由のあこがれだとか、痛苦や不幸から遁れようとする努力だとか云つたところで、もう初まらない。一にも生産だ。二にも生産だ。市場へ積み出す商品を作ることが一切萬事だ。人間の愛も尊嚴も自由もあつたものではない。品物さへ作つてゐればよい。そして儲かりさへすればよい！

そこでカーライルや、キングスレイや、ラスキンは痛烈に新時代の惡徳を攻撃した。然しこれは唯だ新らしい機械的な發達からのみ起つたのではなくて、新發明や新發見

などの基礎の上に、新らしく社會を立て直す事が出来なかつた爲めなのである。そしてこの改造の仕事は、現在吾々の眼の前に進行してゐるのであつて、將來の社會を協同的な、萬人の幸福を基礎とする社會にしようとする云ふのが、此の改造の仕事の眼目である。

人間の智識と技術を大に進歩させた點から見ても、機械の革命は何時までも興味を惹く問題である。然しそれだけではない。機械の上の革命は、廣く民衆の生活と勞働とに喰ひ入つて離すことの出来ぬ關係を持つてゐる。だからそれは人間の健康や幸福や品性や能力の問題として、何時までも深い興味を惹くものである。

第三節 一七六〇年代の英吉利

③ 産業革命によつて起つた社會の變動は、非常に大きかつた。それは工業や、政治や、社會組織に激しい變化を與へた。その變動がどんなに大きかつたかを知るためには、

註
備

一七六〇年代のイギリスに立ち歸つて、産業革命前の舊制度を調べて見るとよい。何と云ふ奇妙な光景が我々の眼前に展けて來るだらう。それは今日のイギリスとは似てもつかぬ、静かな田舎じみたイギリスである。まだ運輸機關や工場の騒がしい叫びにかき亂されない、眠つた様なイギリスである。

十八世紀の半頃には、人々は自分自身の手を動かして色々な生活必需品―食料品とか衣類とか―を造り出してゐた。機械といふ機械は殆んど無かつた。人の手の働らきを助けるものとしては、かたまたま連枷とか原始的な鋤とか紡車とか、手織り機とか、そのほか二三のざつとした道具に過ぎなかつた。所によつては小さいしよくは職場があつたが、その車を廻すには馬を付けたり、水を仕掛けたりして居つた。かうして作り出された商品は、のろい、呑氣な方法で市場に運ばれて行つた。その頃の人間は、一見制し難き大自然の力に壓倒されて、小さくなつて歩く憐れな一寸法師のような觀があつた。

大工場都市は未だ出來てゐなかつた。煙突は林の様に立ち並び、そこから吐き出す硫黄の煙は雲の如く天目を暗くするといふ『煤煙の國』は生れてゐなかつた。噴火口のような衝風爐が、夜は恐ろしく紅連の炎を吹き上げるといふこともなかつた。今日のように、大きな汽車が野を越え山を廻つて轟々の響を立てたり、怪鳥の叫ぶが如き汽笛を吹き鳴らす事もなかつた。そして大工場に集められた多數の労働者群が、熱と埃とに咽び、單調で退屈な機械のうなりに耳を塞がれるような事もなかつたのであつた。

第四節 農業の範圍

一七六〇年にはイギリスの労働者の中、三分の一は農業労働者であつた。普通の製造工業に従事してゐる者も、大部分は一定の期間中、田舎へ行つて農業をやつてゐた。當時英國の人口は八百五十萬人であつたが、その中三百六十萬人は田舎に住んでゐた。そして國民全體の収入は、十一億九千五百萬圓であつたが、そのうち農業に従事する

者の収入は六億六千萬圓であつた。勿論この數字が正確だとは云へないが、これを見ても農家の収入は、國民全體の収入のうち人口の割合以上を占めてゐたことが分る。それは他の商工業に比べると、遙かに割がよかつたのである。多分これは、工業の方面に於て機械の應用が少なく、大勢かゝつても僅かしか出来なかつた、ゆゑであらう。従つて工業方面では、手間や費用の割合には、品物の出来高が少なく、利益が少なかつたに違ひない。

當時どれだけの耕地があつたかは、はつきり分らない。グレゴリー王は凡そ二二〇〇〇、〇〇〇エーカー位であらうと算定した。これは全國の總面積の五分の三に當つてゐる。ところが一七二九年に或る土地管理人の計算したところによると、耕地は總面積の半分しかない。是等の計算は勿論誤りが多いには違ひないが、十八世紀の末頃には、イギリスの各地に廣大な荒地や瘦地のあつた事だけは確かである。これ等の土地は改良されて、今日は豊沃な耕地になつてゐる。

當時、エセックス地方の大部分は、山林で掩はれてゐた。サレイ地方の廣大な廣野は、荒れるがまゝになつてゐた。ケンブリッジ・シイアやハッチントン・シイアの泥炭地には、誰も未だ手を着けてゐなかつた。その邊の廣い荒地は、到底肥える見込がないと思はれてゐたから、誰も手を着けなかつた。

『ロビンフッドはノッチングム・シイアの大部分が矢張シャーウッドの森に掩はれてゐるのを見たさう。ダービー・シイアは全體が一面の黒い菱で埋つてゐる地方であつた。そして北の端からノーザンバランドの端まで百五十哩ばかりの間といふのは、旅人の出遇ふものとは唯だ荒地ばかりであつた。ジャニイ・デインズも矢張り誰にも遇はなかつた。一七三四年頃にはクナレスボロウの森は非常に深かつた。そしてピザアリーからハルへ行く路には、柳が生ひ繁つて高く沼地の上に現れてゐた。夕方になると、旅人を誘ふ鐘の音がバートン・アボン・ハムバーから響いて來た。スレフォードからブリッグへ行く間には、ダンスタンの陸上燈臺があつて、淋しい曠原の旅人に

道しるべを興へたものである。』

第五節 農業の狀態、耕作の制度

イギリスでは農業の狀態が地方によつて變つてゐた。だからイギリス全體の農業狀態に就いて、一まとめに話しをする事はむづかしい。或る所では『土地が非常にうまく耕やされてゐて、肥料も豊かだし、人も澤山住み込んでゐる。そして以前よりは何百倍も多く收穫がある。』しかし交通が不便で智識が行き渡つてゐなかつたので、或る地方で行はれた施肥の改良とか耕作法などが、他の地方へはちつとも知られてゐないと云ふ有様であつた。一般に南部の地方では、うまく耕作が行き届いてゐたが、北部では續けさまに收穫したり、無智な百姓が多かつたりしたので、廣い荒れ果てた土地が随分あつた。尤も産業革命が起る五十年以上も前から、農業の方法には廣く改良が行はれてゐた。之は主にも資産のある大地主がやつてゐた。彼等は農事試験の智識を

獲てゐたばかりでなく、それを實際に行ふだけの資力を持つてゐたせいである。彼等は休閒地に根菜類を植え付けたり、草の貧弱な牧場には、人工的に草を植えたりして、之を利用した。それから彼等は輪裁を初めたので、土地が痩せ切るといふ事もなくなつた。

『此の時代の著述家は、田舎の紳士が土地のことや、土地の性質や、或る耕作法に利益のあることや、蕪は輪裁にする方がよいとか、農具も機械を使ふのが經濟だとかいふようなことを話し合つてゐること、また彼等の父や祖先は、馬小屋の問題についてのみ興味を有つてゐたが、彼等はそれ以上に、家畜や羊や豚の飼養に熱心な興味をもつて、互ひに話し合つたことを記してゐる。』

當時耕地の半分以上は、原始的な共同耕作をやつてゐた。成るほど古い莊園制度は、百姓一揆や其他の經濟的勢力によつて既に破壊されてゐた。然し村のぐるりには、矢張り共同の農地があつて、共同して耕してゐる所が多かつた。共有地は、耕地と草地

と牧地の三つになつてゐた。大抵一人の百姓は平均十八エーカーの耕地と二エーカーの草地とを持ち、共同の牧場に家畜を放つ権利を持つてゐた。しかし小作地の地質や大きさは、人によつて色々異つてゐた。百姓は永小作権を持つてゐるものもあれば、公簿による小作権を持つてゐるもの、隨時または年極めの契約による借地人もあつた。耕地は三つの區分に分れ、その一つ一つがまた畦で幾つにも仕切られてゐた。一つの仕切りは大抵幅が三ヤード位で、面積は一エーカーの所もあり、半エーカーの所もあつた。百姓は少くとも、この仕切りの一つは持つてゐた。耕地の中、一つの區分は、毎年休閑地として何にも作らない。後の二區分には大麥、小麥、燕麥、豌豆、空豆などを作つた。一エーカーとか半エーカーとかの個人の持地は、この三區分の間に散らばつてゐた。草地も又いくつにも仕切られてゐて、村民は籟を引いて之を配けてゐた。然し草を刈つてしまふと、誰が牛や羊を放してもよいことになつてゐた。村のまはりにある荒地も、共有の牧場になつてゐた。

此の制度には、色々弊害があつた。然し一番いけないのは、次の點であつた。

(一) 輪裁法、即ち同じ土地に異種類の作物を交互に作ることは、事實上殆んど不可能であつた。何故ならば、それには一々、村全體の承諾が必要だから、面倒臭くて仕方がない。次ぎ／＼に作つて行くものを一々相談して決めるなど、いふことは、逆ても出来ない相談であつた。

(二) 垣や畦道に莫大な土地を取られた。

(三) 耕地にみんなで牧草を生やしたので、冬作がだめになつた。

(四) 労働者は細かく方々に散らばつてゐる小作地に通はねばならぬので、非常に時間がかつた。所によつては、一つの教區から他の教區の端まで行かねばならなかつた。

(五) 小さい土地の仕切りに就いては、始終争ひや訴訟が絶えなかつた。

(六) 家畜や羊を共同で飼つてゐたので、病氣の傳染を防ぐことが出来ず、品種の改

良も出来なかつた。

當時の原始的な共同耕作の制度は、時代を隔てた吾々には、美しく淳朴に見えるかも知れぬ。けれども全體から見れば、思ひ切つた改良を妨げるものであつた。その上科學的生産の立場から見れば、随分無駄が多く、骨の折れることであつた。

以上述べた弊害から、自然にエンクロヂューアといふ事が行はれて來た。共有地の方々に個人の保有地が小さく散らばつてゐて、種蒔きや收穫の時には非常に不便で不經濟だから、これを整理統一して、一箇所に集めてしまつた。そしてその標として、圍ひ柵をめぐらしたのである。これは中世紀頃から初まつてゐた事であるが、これによつて古い共同耕作制度は次第にぶち壊されて行つた。そして私有耕作が段々盛んになつて來た。十八世紀になつてからは、この傾向は急にひどくなつた。一七一〇年から一七六〇年の間に三三四、九七四エーカーの土地が圍柵エンクロヂューアされたが、一七六〇年から一八四三までには約七〇〇、〇〇〇エーカーが圍柵された。

このエンクロヂューアの制度にも色々な弊害は伴つた。然し此の制度になつて、農業は初めて粗放農法から集約農法に轉じて來た。つまり一つの土地に澤山の勞力と肥料を注ぎ込んで、收穫を多くしようと試みるようになった。そして出来るだけ費用と精力とを切りつめて、出来るだけ澤山收穫を得る様になつた。かういふ事は古い耕作の制度の下では、とても行はれない事である。然しこのエンクロヂューアが出来てから、貧乏人が困るようになったことだけは確かである。前にはどんな小百姓でも、一エーカーや半エーカーの小作地を有つてゐた。それに村のぐるりにある共有の牧場へは、勝手に家畜を放すことが出来た。ところが圍ひが出来て大規模な農作や牧羊が初まると、彼等の土地は取上げられ、共同の牧場へも柵をめぐらすようになった。最早やそこへは出入することが出来なくなつた。少數の者は金持になつたが、一般の小作人は何も彼も奪はれてしまつた。物價は下つたが、貧乏人の生活は色々な事情で困難になつた。

第六節 農村の生活状態

農業労働者の生活状態は比較的よかつた。賃銀は一週八シリングから十シリングであつて、生活費は五シリングから六シリングで足りた。家賃は安く、現物は豊かであつた。その上きまつた収入以外に、絲紡ぎとか、機織とか、レース編とかの内職があつたので、足りないところもそれで補ふことが出来た。

まだ今日のような交通機關はなく、往復は不便で、村と村とは孤立してゐる様なものであつた。生活は單純で、教育は行き渡つてゐなかつた。此の當時の著書を見ると『五千^十人の百姓のうち、一人位はかいもく文字がよめなかつた』とある。交通の不便もさることながら、他の世界と往來する必要は殆んど無かつたのである。

村は殆んど自給自足であつた。食料や衣服や家屋や道具なんかは、皆自分で作つてゐた。『どの村にも大抵領主のものになつてゐる水車が一つ宛つあつた。そこで村中

の製粉は間に合ふた。大概どの家にも、籠と酒を作る時の大釜が据え付けてあつた。女は羊毛でキメの粗い布を織るし、男は自分の革をなめすといふ調子であつた、財産と云つても、簡單なものであつた。農具は非常に單純幼稚なもの許りであつたから、格別仕事を分けてやる——即ち分業で仕事をする必要もなく、皆が同じような仕事をやつてゐた。土地を耕やす荒作りの道具も自分で作れば、日常生活の便利に供する家具類も、自分の家で作るといふ有様であつた。』

第七節 農具

この時代にも、既に勞力を省く道具や機械は、發明されてゐた。然し當時の農具は、決して進歩したものではなかつた。エデンは一七九七年頃の事を書いてゐるが、當時イギリスの各地方で用ひられてゐた犁は、古いローマ犁と大差はなかつたと云つて居る。それから其他の農作上の機械だつて、昔からちつとも進んではゐなかつたと云つ

て居る。小麦は昔から連枷からさぎで叩いて粃もみを落してゐたが、その頃やつと、こいで落すよ
うになつてゐた。種を蒔く時には手でやつたり、馬につけた條播機を使ふたりしてゐ
た。收穫には、手鎌を使ふのが普通であつた。牧草を刈つたり根菜類を掘るにも、手
道具を使ふてゐた。また一般には木製の犁が用ひられ、荷車の幅は狭く、車輪は小さ
かつた。兎に角道具は總じて原始的な粗末なものばかりであつた。

第八節 一七六〇年代の製造品

毛織物業は當時、『國富の源泉』と云はれたほど一番重要な位置を占めてゐた。輸出
總高の四分の一は毛織物類であつた。毛織物工業の中心は、一ヶ所に集つてゐたので
はなく、大小の中心がイギリスの各地に散ばつてゐた。綿織物業は當時まだ盛んでは
なかつたが、その中心はランカシャー地方であつた。マンチエスターやボルトンから
出る製造品の大部分は、綿絲類であつた。マンチエスター市の内外には、非常に澤山

の紡績工が雇はれてゐた。その數は市内で三千、市外で五萬と註せられてゐた。綿織
物の輸出先は今日のように矢張り米國が主であつた。然しその輸出高は、毛織物の二
十分の一にも足らなかつた。

毛織物の次に重要なのは製鐵業であつた。ホブソンに依れば、製鐵工業の各部門に
雇はれてゐた人の數は二十萬人であつた。重な中心はサセツクス地方であつた。そこ
には十個の熔鑛爐があつて、毎年千四百噸の鐵が出来てゐた。ニューカスル・オン・チ
ーンから四哩離れた所には、ヨーロッパ有數の大鐵工場があつた。ローサラムも亦た、
大きい鑄造所があるので有名だつた。

十八世の中頃れの工業は、却つて十七世紀の終頃よりも衰へてゐた。何故ならば、當
時は鐵鑛を鎔かすのに木材を用ひてゐた。それ故薪材が非常に缺乏したので、政府は
法令を以つて製鐵業を制限しなければならなかつた。それで一六九五年には鐵の産出
が殆んど一八〇、〇〇〇噸に達してゐたが、一六四〇年には一七、三五〇噸に下つた。

製鐵業はまだ比較的幼稚であつた。一八八一年になつても鐵と鋼鐵との産出が八、三二〇、三二五噸を出でなかつたのを見ても分る。

スタッフオードシイアは陶器業の中心であつた。之には一萬人の職工が従事してゐた。金物類と刃物類は、主にもシエフィールドとバーミンガムで製造された。此の二市は、今日でも、矢張り大工業の中心になつてゐる。眞鍮と銅に關する工業には、一七二〇年頃、約三萬人の職工が従事してゐた。そして絹織物、メリヤス、リンネン、ガラス、等の小工業も、次第に盛大になりつゝあつた。

第九節 一七六〇年以前の機械の發明

一番重要な毛織物工業には、非常に原始的な機械が用ひられてゐた。絲を紡いだり、織つたりするのに、勿論手でやつてゐた。但し織物機械にはほんの僅かの改良が施されてゐた。一七三〇年にワイアットが巻軸紡績機を發明したが、直ぐ實地に使用される

ようにはならなかつた。一七三八年、ベリーのジョン・ケイと云ふ人がフライ・シャツトルと云ふ機械を發明した。之は一本の絲を引けば梭が運動して、勝手に織物の巾を延ばせるようになつてゐた。そして仕事は以前の二倍ほど出来るやうになつた。

十八世紀の初頃には、更紗に型を押しつけて染めることが非常に進歩してゐた。そして身分の賤しい下女とか並の貧乏人まで、更紗を着て歩くことが出来た。シエフィールドかニューカッスル・オン・チーンとかの大工場では、水力が利用せられてゐた。水力で人間の勞力を省く機械は、鐵工場でも用ひられてゐた。ヤングは斯う云つてゐる。『製造上の色々な作業を速める機械の中、棒を輪に曲げ込む銅のローラ、鐵の地金を切る鋏、アンカーを火の中へ入れたり出したりする鐵桿、車の輪齒で持ち上げられる鐵槌——こゝにいふ機械は皆な非常に實用向きで、構造は簡單だつた。そしてすべて水力で動かされてゐた。』

發明時代は、まだ來てゐなかつた。そして仕事は大抵、動力で働く機械の援けなし

に行はれてゐたのである。

第十節 産業の組織

機械の發明以前のイギリスには、工場は極く僅かしかなかつた。しかし資本はうなるほど溜つてゐた。農業に従事しないで、他の工業に従つてゐる人々でも、田舎に住む者が多かつた。そして僅かばかりの耕地を持つてゐるのが、普通であつた。ウエスト・ブロムキッチの鐵工やシェフィールドの刃物工でも、土地にくつ着いてゐた。イギリスの工業で、多かれ少なかれ農業と關係のないものは、尠なかつた。

物品の製造は、謂ゆる家内工業の制度の下に行はれてゐた。工業は未だ大『産業王』の手には集中されてなかつた。それは無数の小屋に住む人々や、職人と密切な關係を持つてゐる小さな親方の間に分散されてゐた。彼等は皆自分の小屋で仕事をした。然し機械の發明以外にも、工場制度の發達が可成り進んでゐたことを見逃してはならぬ。

制度は、全く機械の發明と蒸氣力を用ひる工業の結果として現れたかのように思ふのは大きな間違ひである。何故なら機械の發明と蒸氣力の應用以外にも、専門的な工業と大工業組織を促す原因があつたからである。ホブソンはこの原因をうまく分類して、次の三つとした。

(一)土地との關係。例へば鐵鑛を鑛かすのに木材を用ひたから、鐵工場は自然、山林の近くに建てられた。水力を要する工業は、北部の丘陵地方の河に沿ふて發達した。

(二)市場に近いこと。市場を提供する大都市のぐるりには、或る特別の工業が發達するのは、見易い道理である。

(三)商品の性質。運送の便利が悪く、長い時間のかゝるような所では、重い商品や毀れ易い商品は造られなかつた。

デフォーは英國旅行記(一七二四—二六年)の中で、其頃のハリファックスやヨークシ

イア邊の工業生活を、次の如く活き／＼と寫してゐる。

『土地は小さく圍ひの柵で仕切られてゐた。一つの圍ひは大抵二エーカーから六エーカー位であつたが、時にはもつと大きいのも眼にかゝつた。そして三つか四つ毎に、一軒の家が附屬してゐた。家は互ひに、大聲で呼んだら聞える位に接近してゐた。どの家にも張布架があつて、その上には大概、布や粗羅紗や、しやろん織の片れがかゝつてゐた。可成りな家には、どこにでも職場があつた。そして少くつとも、一頭の馬を飼ふてゐた。それは家で出来た品物を市場へ運んで行くためである。それからどの家にも、一匹や二匹の牛を飼つてゐない所はなかつた。家によれば、もつと澤山飼ふてゐるのもあつた。是等はすべて自家用の牛乳を搾つたりするためである。』

家のぐるりにある狭い土地はみなかういふ家畜や職場のために占領されてゐた。それ故鶏や七面鳥にやるだけの穀類も作れなかつた。家の中は、元氣な若者で一杯になつてゐた。或者は染料桶で絲を染めてゐるし、或者は機械の上で布を織つてゐるし、

また或者は布の仕上げをして居た。女や子供は絲を紡いだり梳いたりしてゐた。老ひたるも若きも皆かうして働いてゐた。』

然し一七六〇年頃には、物事はかなり變つて來た。家内工業は、機械の大發明によつて、最後の一撃を受けようとしてゐた。それと同時に資本主義制度はそろそろと姿を現はしかけてゐた。

第十一節 資本主義

十八世紀までは、地主階級がイギリスの政治と社會生活とを支配して居つた。しかしそれ以後、彼等の勢力は下り坂になつた。地主の貴族階級に並んで、有力な商人階級が勃興して來た。その富は彼等に勢力を與へ、彼等は社會にしつかりした位置を占めるようになった。初め彼等は、外國貿易で莫大な富を得た。これが謂ゆる商業資本家である。次に家内工業で莫大な富を作つた資本家が現れた。この種の階級は機械の發

明後益々増加し、その富も次第に大きくなつた。そしてやがて他の職人の主人となり、一七六〇年代には多数の労働者を使用する二三の大工場さへ出来上るようになった。労働者と雇主との関係も、次第に今日のようなつて来た。

工業の一番簡単な形は、『家内工業』であつた。この産業組織では、原料も道具も動力も、皆な一家の主人が持つてゐた。それが集つて、全國民の産業組織の一部分をなしてゐた。昔の人々は、自分自身の欲望を充たすために働いたものだ。しかし社會の機能が複雑になるに従つて、分業が起つて来た。布を作るにも、昔は自分で綿花を作り、自分で糸を紡ぎ、自分で織つたものだ。綿花の種を蒔くことから衣服に仕上げることまで、皆な自分一人でやつてゐた。勿論これに必要な色々な道具も、自分で持つてゐた。ところが社會が進んで、綿花を作る者は綿花を作るだけになり、米を作るものは米だけを作り、織るものは織るだけになつた。片手間に百姓をやつてゐるよりも、機織りばかりを専門にやる方が得であり、その材料の糸も始終途切れずに手に入るこ

とになれば、自然に精力を機織りばかりに注ぐようになる。そして得た金で米や麥を買ふことになつた。百姓も片手で機織りをやるよりも、専心に土を耕やす方が得であるとなれば、一心に農業に努める。そして餘つた米麥豆等を賣つて、布を買ふようになった。

斯ように、産業社會が進歩すると、分業が行はれ、産業が専門的になつて来る。これは前にも云つたように、初めは職人が、自分で道具を持つてゐた。そして必要な時には、自分で原料を買つて来て、何でも入用な物を作つてゐた。しかし家内手工業者と雖も、市場の状況には左右されてゐた。何時でも適當な原料を入用なだけ手に入れるといふ譯には行かなかつた。だから原料を手に入れるには、絶えず困難が伴ふた。この困難を排除するために、仲買人といふものが、原始的な産業界の一要素として現れたのである。ゼームスはかう云つてゐる。

『仲買人は先づ百姓のうちを廻つて、原料の羊毛を買ひ集めるか、または昔から大

市場が開かれる古い町へ行つて買ひ入れて来なければならぬ。そのために、彼は馬に乗つて歩き廻つた。かうして得た羊毛は、撰り手に引渡される。撰り手は嚴重に之を調べて、所要の長さに達しないものや、織物用の羊毛としての適當な標準に達しないものは容赦なくはね捨て、しまつた。かうして検査を通つた長い羊毛は、梳き手に渡された。梳き手は之を奇麗に梳いて又た再び撰り手に返へす。仲買人は之を受取つて、丁寧な荷造をし馬の背中に括り付ける。そして糸に紡いでもらふために、田舎へ持つて行くのである。田舎にはどの村にも彼の代理人がゐた。そして此の羊毛を受取つて百姓に配つた。百姓は之を糸に紡いで返へすのである。

『この頃百姓が用ひてゐたのは、矢張り古い糸車であつて、一本づゝしか紡げなかつた。夏の天氣のよい日には澤山の家婦が青草の上に座つて、忙しく糸車を廻してゐたものだ。かうして自分の家の戸口で、歌でも歌ひながら糸を紡いでゐるのを見ると、いかにも満足な平和な生活のように思はれた。』

『さて仲買人は百姓から、糸になつたものを受取ると、今度は織手を探し出さねばならなかつた。そして織手からは、初めて完全な毛織物となつて、彼の手元に歸つて来るのである。それを商人に賣るなり、更に染物屋に引渡すなり、好いた通りにするのである。』

トインビーはまた次のように云つて居る。

『ランカシャー地方では、資本家的雇主が次第に出来上つて来た跡を、一步一步たどつて見る事が出来る。ヨークシアでもそうだつたが、機手はタテ糸とヨコ糸を買ふて来て、自分の家で布に仕上げ、自分で市場へ擔いで行つたものだ。最初ほどの機手もさうしてゐた。ところが紡ぎ手から糸を買ふのが次第に困難になり、不便になり、糸が間に合はぬことがよくあつた。そこで、マンチエスターの商人は、麻のタテ糸と綿花とを、機手に當てがふようになつた。機手はもう直接に紡ぎ手から糸を買はないで、マンチエスターの商人の供給を當てにするようになつた。かうして機手は

商人にたよるようになり、従属するようになった。そこで商人は次第に機手の親方のようになつた。

『彼は原料を當てがつて布にしてもらひ、その手数料を機手に拂ふようになった。機手は、道具を持つてゐるが、原料を持つてゐない。商人はそれをあてがつて、布に織らせたのである。ところが時を経るに従つて、機手の道具までが商人のものとなつた。終には彼は町の真中に工場を建て、二十臺も三十臺もの織機を据え付けた。そして田舎から機手を雇ふて来て、布を織らせるようになった。もう機手は、道具も原料も自分の物ではない。出来上つた品物は固より、工場の持主たる主人のものである。彼はたゞ賃銀をもらふて、自分の労力を提供するに過ぎないものとなつた。機械革命前にも、これほどに資本主義制度に近づいてゐたのである。』

かうして家内工業が工場制度に遷らない前から原料の所有権は商人の手に移つてゐた。家内工業はこの點から壞れかゝつてゐた。然しそれを完全に破壊してしまつたの

は、機械の動力が利用されて手の労働が駄目になつた事である。これは見落してはならぬ事柄である。

一七七五年と云へば、餘程後のことであるが、その時でもアダム・スミスは、次のように考へてゐた。合資會社の大資本を巧く運用するには、銀行業や保険業や、掘割運河等を作る事業や大都市に水を供給するような大事業でなければならぬ。その他の小さい事業では、駄目であると。そして彼は今日のような大工業に就いては、一言も云つてゐない。當時そんなものは、まだ現れてゐなかつた。之を見ると家内工業が倒れて工業制度が起つたのはたゞ商人の手に大資本が集つてゐたからではない。スミスの時代にも、既に大資本を有する合資會社は出来てゐた。然し家内工業は依然として行はれ、工場制度は未だ生れてゐなかつた。そして此の工場制度がほんとに生れたのは、機械が發明されて手工労働がだめになり、大規模の生産が行はれるようになったから
の事である。

第十二節 一七六〇年代の労働者の生活状態

當時労働者の生活は一般によかつた。勿論これを今日の状態と比較して考へることは、非常にむづかしい。何故ならば今日のうちに數千人の労働者を使用する、色々な大工業は、當時まだ生れてゐなかつた。だから比較すべき共通の標準といふものがない。假ひ労働者の状態を調べ、精細な統計を取つてその一般の状態が知れたとしてもそれは殆んど無意味な事である。

トインビーが職人の生活に就いて、アダム・スミスの時代よりは遙かに改善されてゐると云つてゐるのは、本當らしい。今日のやうな大工業都市はまだ起つてゐないし、労働者は今日のように、汚ないじめくした、薄暗い小屋に詰め込まれてはゐなかつた。仕事はずつと安定してゐたし、物價は今日のように、上つたり下つたりはしなかつた。何故ならば商賣は大部分、小規模で確かな基礎の上で行はれ、昔からよく知れ

た、きちんとした慣習によつて行はれてゐたからだ。食料品も相當な値段であつた。労働者は受け取つた賃銀で、樂に單純な生活が出来た。一般の生活はずつと單純で生存競争は今日のように激しくはなかつた。機械や激しい競争が惹き起す性急や突進や騒ぎは起つてゐなかつた。仕事は靜かに流れてゐた。

當時『製造工場』で用ひられてゐた安い簡單な道具は、大した資本がなくとも手に入れることが出来た。だから資本よりも労働の方が、比較的に重きをなしてゐた。労働は資本よりも、大切であつた。之は、資本主義的工場制度の下に於ける労働者の運命とは、除程異つた自由を彼等に與へた。で彼等は或る點までは、自分の主人公になることが出来、自分の思ふやうに仕事をする事が出来た。成るほど彼等には、節儉や勤勉によつて、金持ちになることは容易ではなかつた。然し貧乏を抜け出すことは、努力次第で出来ない事でもなかつた。

今日のやうに手早く運送の出来る時代に、工場や水車や田畑で出来た物を荷車、運河の小舟、又は馬の背などに積んで、やつとこさで市場まで引きすつて行つた時代の事を想像するのは、なか／＼むつかしい。

一七六〇年頃には、商品の大部分は市場か、又は年に一度の大都市に持つて行かれたものだ。買手や賣手は荷馬を引きながら、野を越え山を越えて商賣して歩いた。或る村では原料を仕入れ、或る村では製造品を賣り捌いた。運送の不便に加へて、道路は非常に悪かつた。アーサー・ヤングはその旅行記の中に百二三十の道路に就いて書いてゐるが、そのうち比較的よいのは五十三、可なりなのが四十一、すつと悪いのが二十あつたと云つてゐる。彼はよく次の例を擧げてゐる。

『ウイガンへ行く。この道の悪さと云つたら、何と云つていいやら見當が付かない。

地図を見ると、此の道は重要な道路だ。單に都會に續いてゐるのみならず、遠く田舎の方へも及んでゐる。だから誰しも、相當な道だらうと思ふのも當然だ。ところが事實はさうぢやない。私は最も真面目に、此の恐ろしい田舎を假りにも旅しようとする人々に忠告する。悪魔を除けるように、この道路を除けなさいと。千人の中、九百九十九人までは轉んだり躓いたりして、頸を折つたり、手脚を折つたりするに違ひない。この道には、ひどい車の轍のあとがある。私は實際に計つて見たが、驚く勿れ深さが四尺もあつた。丁度夏の雨時とて、どろ／＼と泥濘が溢れてゐた。春先の雪解け頃には、どんなであらうか。』

然し澤山のすばらしい馬があつたので、比較的樂に、且つ手早く運搬が出来た。十八世紀の終り頃になると、運輸の問題は、可なり世間の注意を惹くようになって來た。

『運河は英國全體に亘つてどし／＼作られてゐた。一七七七年にはトレント河とマールセイ河を連ねる、長さ九十六哩のグランド・キャナル運河が出来上つた。ハルトリ

ヴァブールは一つ運河で繋がれた。それからブリュッセルからこの二つの町へも運河が通じた。一七九二年には長さ九十哩のランド・ジャンクション運河が開通した。これによつてロンドンからオックスフォードを経て、内部の主なる町々に通ずる水路が出来た譯だ。その後數年經つて、テルフォードとマカダムの指揮の下に、道路は非常に改善された。』

河や運河によると、運搬費は少くて済んだのであるが、その開通や修繕の費用は、非常に取引や工業に影響した。

幼稚な運輸制度は、長い徒弟生活や、不便な居住法や、世間一般が全體の商工業に通じてゐなかつた事などと相俟つて、資本と労働とが自由に流動するのを妨げた。そしてこの資本と労働との自由な流動こそ、現代産業の特徴なのである。

第十四節 政治と政府

歴史を研究して見ると、人類の進歩は、絶えず、同じように規期正しく行はれてゐる譯ではなく、止つたり續いたりして來たものである。そして外から見れば何でもなさうな原因にも、よく左右されるものである。どの時代の社會にしる、その横斷面を得ることはなかくむづかしい。だからブステル・デユ・クローランジェも封建制度に就いて『それは無限に廣大で、澤山の機關を持ち、色々な異つた方面を持ち、複雑な生活を營んでゐた社會である』と云ふてゐる。

進歩して行く社會は、丁度澤山の色をした液體が、一つになつて流れて行くようなものである。それは互ひに混ざり合ひ、こんがらかひ、時には停滯し、凝固し、或は數ヶ所で氷結し、又は他の流水の中に溶け込んだり突入したり、廣くなつたり深くなつたりする。或る時代の統計を取つて、その時代の社會の法則を分類し研究することは容易な事である。然し政治及び社會の發達の問題は非常に複雑で迷宮的であつて、どんなに注意深く行届いた記述をしても、すぐ役に立たなくなる。社會は始終進歩し、

變動するからだ。

若し或る時代の社會上政治上の制度を記さうとすれば、其の時代の制度は、發達と膨脹の萌芽と共に頽廢と收縮の傾向をも含んでゐると云ふ事實を、始終念頭に置いてゐなければならぬ。しかし其の時代の生活が、單純であればある程、正確に、記述する事が出来る。それ故十八世紀の社會的政治的狀態を記すことは、今日の狀態を記すよりも遙かにたやすいことである。

一七六〇年のイギリスの經濟上、政治上、宗教上、及び社會上の組織は、根本に於て中世紀的であつた。其の主なる一般的の特徴は、社會の構造が嚴格で、作用が不變であるといふことであつた。社會の構造と作用といふ意味は、セイノボーが云つてゐるように、『その社會の人々に職業と享樂とを割りあてる掟や習慣を指す。また社會の作用とは、人々が互ひに接觸し合ふやり方で、昔から定まつてゐるものを云ふ。』のである。

社會の構造が如何に嚴重であつたかは、一一六四年の大憲章の最後の章を見ればよく分る。それには『百姓の子弟は、その生れたる土地の領主の承諾なくしては、僧職に就く事を得ず』とある。この一句は、中世的社會組織の特徴を明らかに示してゐる。人々は否や應なしに、生れついた社會的地位にこびり着いてゐなければならなかつた。百姓の子は生涯士を掘らねばならず、商人の子は一生算盤を弾かねばならなかつた。當時契約の自由なぞといふことは、ちつとも知られてゐなかつた。社會の事は一切合財、國王の指し金通りであつた。國王は勝手に法律や命令を發したり變へたり、國際關係や社會的產業的變動を左右したりした。國王も奴隸も百姓も武士も、あらゆる階級の者は、否や應なしに親の跡をつがねばならず、その階級の約束に従はねばならなかつた。

然し此の制度が、何時までも絶對的な不動なものであつたとは云へぬ。色々な原因がこの制度を動かした。無責任な國王、無政府的な狀態、海外からの影響、都市の發

達、職人階級の勃興等は、既にこの嚴重な制度を揺がしてゐた。百姓一揆や饑饉や自由労働者の増加なども之と同じような影響を與へてゐた。チエードル時代に初まつた商業の發達も、亦た封建制度を崩壊に導く一つの力であつた。

然し一七六〇年までには、この社會制度を全體から揺がすような、猛烈で大ほげさな變動は起らなかつた。農業には、まだ農村共有制の面影が残つてゐた。物價や賃銀は、名義上だけでも法律によつて定められてゐた。

取引はすべて町のギルドに支配されてゐた。國と國との貿易も、特許を受け特權を與へられた商館だけがやつてゐたのであるが、之にも法律の制限があつた。何だつて勝手にはやれなかつた。

産業革命の直ぐ前には、國王は名義上だけは國會に従つてゐた。然しその政府は、多かれ少かれ國王の指圖に左右されてゐた大地主の貴族階級の掌中にあつた。だから事實は國王のものであつた。こゝにも個人の自由といふものは無かつた。「一方人民は

どうかと云へば、『長い數世紀の重みに壓せられ』長い間傳つて來た習慣や傳統や法律の下に呻吟して居つた。

第十五節 外國貿易

イタリー、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスは産業革命前の數世紀の間に、東洋貿易に依つて、順繰りに非常な金持ちになつてゐた。然し一七六〇年には、まだどの國の輸出高を見ても、全生産高から云へば言ふに足りないものであつた。丁度農村自治體が互ひにはなれてゐて、大部分自給自足であつたように、國と國とも亦た獨立的であり自足的であつた。従つて或る國が世界の工場になるなどといふ考へは、誰の心にも起らなかつた。

十八世紀の初め頃になつても、イギリスの輸出額は國內取引の六分の一にも達せず、その輸入額は、國內消費高の僅か二十分の一にも足りなかつた。

私は大産業革命前のイギリスの産業状態に就いて、大體重要なと思ふところを述べた。まだ農業には原始的な制度が蔓つて居り、機械と云へば幼稚な物が工夫されてゐただけであり、産業制度は比較的單純で、政治と政府とは、中世的だつたことを述べた。此の一章は非常に廣大な研究の領域に就き、ほんの僅かな暗示を與へたにすぎぬ。しかし主要な點は悉く述べたつもりである。若しそれらの點を十分に理解したならば、次に述べることは容易に理解されると思ふ。

B

第二章 機械革命と其の經濟的影響

第一節 前章の概要

前章では、産業革命前のイギリスの産業及び社會の状態を述べた。當時農業は、政治的立場から見ても、經濟的見地から云つても、一番重要なものであつた。國家の収入の大部分は農業から來た。大地主は社會上主要な地位を占め、行政上政治上の無限の權力を握つてゐた。工場制度はまだ勢力がなく、家内工業が依然として行はれて居つた。デウフォによれば、大概の製造品はギルドに支配され、専ら國內の消費を目的としてゐた。たゞ農産物を原料とする製造品だけが、多少輸出されてゐたに過ぎなかつた。

産業はまだ専門化されず、外國貿易は比較的にななかつた。國家なり自治體なりは、

大抵自給自足であつた。労働者が資本家に頼る必要も大してなかつた。

成程その頃までに、機械の發明も無いではなかつたが、人はまだ凄まじい自然力を利用して術を知らなかつたので、その活動の範圍は非常に狭く、限られたものであつた。實際十八世紀初頭のイギリスは、中世的なイギリスであつた。静かで、原始的で、まだ商工業の騒ぎにかき亂されないイギリスであつた。ところが突然、晴天の霹靂のやうに産業革命の暴風がやつて來た。大發明や大發見が相ついで現はれた。數世紀間の機械的發見も、この僅かな百年足らずの發見に色を失つてしまつた。

第二節 産業革命の要點

吾々が今研究しようとする題目は非常に廣大で、そこに働いてゐる力は非常に複雑であり、調べる項目には際限が無い。だから吾々は勝手に研究の區域を制限し、事實存在しないやうな區分をも、便宜上設けねばならぬ。

それで先づ、明白な誰にでも分る發展から初めて行かう。即ち第一に機械の發明に現れた進歩、第二に統計に現れた方面を調べることにしよう。それが済むと、もつと漠然として微少な變化、即ち人間生活の各方面に觸れた社會的變化を調べよう。で先づ我々は機械の方面に注意を向ける事にする。

こゝで過去百五十年間の機械的發明や改良に就いて詳しく述べる事は、望ましい事ではあるが、それはとても不可能である。

原始人が用ひた獨舟から今日の何萬噸もある大洋通ひの汽船、昔の絲卷竿から無數の錘が忙しく回轉する不思議な今日の紡績機、その間の進化の歴史を調べるのは、その事自身が非常に興味あることである。然し吾々が今問題としてゐるのはそれではない。吾々社會問題を研究する者に取つて、何時までも深い興味を興へるのは、この進歩發達が人間の生活や労働に及ぼした影響である。機械革命の特徴は、自然力を使用して人間の仕事をなさしめたことにある。そして其の重要な點は、人間の生産力を素

晴らしく増加したことである。これが興味の中心である。

この生産力の増加は次の三つの原因に依る。

(一)あらゆる工業と製造業には、色々異つた混み入つた過程が必要である。ところが今、この色々の過程を全部成しおはせる機械が發明されたのであるから之によつて生産力は非常に増加した。

(二)人間力以外の自然力を廣く機械の運轉に應用した。

(三)分業及び産業の集中。

第三節 紡績業

生産方法の革命を一番鮮やかに示すものは、織物業である。これはあらゆる工業の中、最も重要なものゝ一つである。何故ならば、それは温度を求めるといふ、人間本來の單純な欲望を充たす爲に必要な物を提供する産業だからである。絲を紡いだり織

つたりする歴史は、ずつと有史以前に遡つて、原始人が動物の皮を剥ぎ、織つた衣の代りにした頃に初まつてゐる。

古代イギリスの歴史を見ても、羊毛は夙に一つの輸出品であつた。一一〇〇年頃の書物の中に、リーディングの金持で呉服屋のことを斯う書いてある。

『彼の布で一杯になつた荷物は、リーディングの町からロンドンまでの街道を埋めた。』

數世紀の間、原料の仕上げは、皆な人間の手でやつてゐた。二三の道具はあつたが荒削りの木にすぎなかつた。原料を梳いたり整へたりする爲めに用ひる木櫛は、長さが五寸乃至六寸あつて、齒は奇麗に附けてあつた。絲を紡ぐ道具としては、唯だ絲捲竿と軸とがあるばかりであつた。紡ぎ手は脇の下に梳いた羊毛を抱へてゐて、二三本づゝ引き抜いては二三寸撚を掛ける。そしてぐる／＼廻つてゐる木の軸の先きにくつ着ける。すると羊毛の纖維に撚が掛るのである。

やがて絲捲竿が廢つて、糸車^{スピンニグ}が流行するようになった。一般に用ひられるようになったのは六世紀の初め頃らしいが、それは當時の驚くべき發明であつた。然し一七五七年頃にも、矢張り糸捲竿を用ひる者があつたと見えて、あるイギリス詩人は次のように歌つてゐる。——『まだ多くの人々は、昔の絲捲竿を棄てずに、胸にあてて歩みながら縦軸を廻す。家の中でも、羊小屋でも市場でも、みんながこの仕事をやつてゐる……』

織る方法も、紡ぐのと同じ程度に幼稚なものであつた。まだ踏木の附いた古い織機が用ひられてゐた。梭と云つても、ほんの平たい枝の兩端を尖らしたもので、この梭に横糸を捲きつけたものである。一七六〇年前にも、小さい發明は二三あつた。そしてそれだけでも、織手の生産力は少し位増加して居つた。

一七三八年にケイがフライ・シャトルを發明した。これで織手は、二倍の仕事が出来るようになった。一七四八年にバーミンガムのルイ・ポールが廻轉式梳綿機を發明

して、其の特許を受けた。然し實際に利用されるまでには、引續き五六回の改良を経なければならなかつた。然しケイのフライシャトルは直ぐ利用され、仕事が二倍も出来るようになったのだから、急に絲の需要が高まつた。ところが是れまでは、絲は糸車で紡いでゐたので、最早それでは間に合はなくなつた。そこで絲を紡ぐ新方法が、懸賞で募集せられることになつた。

その後三十年経つて一七七〇年に、ブラックバーンの機械工ジョン・ハーグリーブズが多軸紡績機を發明した。之は八本の錘が一本の軸で廻轉するようになったから、一人で八本の絲を同時に紡ぐことが出来た。つまり生産力が八倍になつた譯である。その上この機械は、子供でも扱へたし、値段も安かつたから、非常に便利であつた。ところが或る職工達は、此の新發明の話を聞いて、自分の仕事が無くなると思つた。そして直ぐハーグリーブズの家に押し掛けて新機械をぶち壊した。然しこの發明家は、そんな事には怯まなかつた。

一方ボールは、ケイのフライ・シャトルが出来ない前から、ウイヤットと協同して、一つの紡績機を考案して居つた。それは異つた速度で廻るローラの間から糸を引き出さうといふ仕掛けであつたが、不幸にして實際に用ひられるには到らなかつた。

一七六八年、アークライトは此の考案を具體化して、『ウラタ・フレム』といふ紡績機を作つた。これは四對のローラから出来上つてゐて、其間から糸が紡ぎ出されるものであつた。そしてローラは、水車によるベルトで廻るようになってゐた。アークライトは單に今までの發明を利用したゞけではあるが、彼が一つの重大な進歩を成し遂げたことは確かである。これまで、織手はたて糸に麻絲を用ひてゐた。之は普通の絲では弱かつたからである。ところがアークライトの新らしい機械では、たて糸にしても大丈夫な、強い堅い綿絲が紡げるようになった。で態々麻絲にする必要がなくなつて、大變便利になつた。

アークライトはなか／＼抜目のない事業家だつたから、忽ちにして大成金になつた。

次いで一七七九年クロムプトンは多^種紡績機と、アークライトの『ウオタ・フレム』とを巧みに結合して、走錘紡績機なるものを作つた。これで紡績の方の發明はほど、完成した。然しクロムプトンはアークライトのような金儲けはしなかつた。彼が立派な發明をしたことを聞きつけて、ボルトンの同業者は彼を攻圍した。クロムプトンは彼等の亂暴を怖れて、寄附を受けるといふ約束で自分の考案を打ち明けてしまつた。その寄附金は集まつて見ると、たつた七百圓餘りしかなかつた。彼れの發明で他の者は非常な金持ちになつたが、彼は落膽と貧窮の中に死んでしまつた。

これ以來、今日のような立派な紡績機が出来上るまでの色々な改良に就いては、こゝで詳しく述べる必要がない。吾々は次に織機の發明を調べて見よう。

この方面でも、紡績と同じく大なる發達を遂げた。動力で運轉される織機の發明に第一歩を踏み入れたのは、ケントの牧師カートライト博士であつた。彼は織物業に就いては、何等の知識も持つてゐなかつた。そして動力織機を作るまでは、機械の事に

も興味を持つてはゐなかつた。カートライトは發明に興味を持つようになった原因や動力織を作り出すに到るまでの苦心を、自分自身で述べてゐる。それを見ると産業革命の黎明時代には、人々はどんな風に考へてゐたか、どんなに仕事をやつてゐたかがよく分る。それ故、こゝに全文を引用して参考にしよう。

『一七八四年の夏、私はマットロックで偶然にも、マンチェスターの商人と一緒にゐた。そして話がアークライトの紡績機のことになり、連中の一人が云ふには、アークライトの特許の期限が切れたら、急に工場が殖えて、一時に澤山の絲が紡がれることになるだらう、それで従來のように手で織つてゐたのでは、絲の始末が着かなくなるだらうと、この觀察に對して、私はかう答へた。アークライトは吃度新しい織機の發明に取り掛るだらうと。

それから話は、この事で持ち切りになつた。マンチェスターの商人達は、異口同音

に、そんな機械はとても發明されまいと云つた。それを證明するために色々な議論を持つて來たが、私はそれに答へる資格もなく、理解することさへ出来なかつた。何故なら私は、まだ一遍も布を織つてゐる人を見たことがなかつたので、この問題に就いては、皆目分らなかつたからである。然し私は、彼等の説を反駁して、機械の發明は必ずしも不可能ではないと主張した。そして最近ロンドンで展覽に供せられた自働人形が象棋をさしてゐたことを話した。私は斯う云つた。

「そこで諸君、あの複雑な勝負をするのに必要な色々な動作を、平氣でやつて行くよ
うな機械が出来るからには、織物をやる位な機械が作れないとは、よもや申されまい」と。

それから暫らく経つて、私はふと或る事から、この時の會話を思ひ出した。そして考へた。物を織るのには、僅か三つの動作さへあれば澤山だ。それを互ひに、順繰りに繰返しさへすればよいのだ。この三種の動作を表して、順繰りに繰返す位な装置は、

大してむづかしくもなからうと。

そこで私は、直ぐ大工と鍛冶屋を呼んで来て、この考へを實際に試みて見た。機械が出来ると、一人の織物工を呼んで、たて糸を入れさせた。それは帆本綿に使ふような強い糸だつた。ところが嬉しい事には、どうなりかうなり布のような物が出来上つたのだ。

私はそれまで機械に就いては、理論も實際も考へたことはなかつたし、織機の構造やその働らき工合を見たこともなかつたのだから、讀者は定めし、この最初の織機は、随分幼稚な粗末な機械だつたらうと思はれるに違ひない。確かにそれに違ひない。たて糸は垂直に置かれ、箆は少くとも五十ポンドの重さで落ちて来た。それに梭を投げ掛けるバネはコングリーブの火箭を飛ばすほどの勢ひだ。一口で云へば、此の機械をちよつと動かすにも、男二人の力が要る。それも永くは續かない。直ぐグタ／＼に疲れてしまふ。それから更に改良して特許を得たのが一七八五年の四月四日のことだ。

これは其當時最も値打ちのある特許だと自分では考へてゐた。それから人々はどんなにして、此の機械で織つてゐるかを視察に出掛けた。ところが驚いた事には、人々は自分の機械で、實に安々と仕事をやつてゐたのだ。で、私は自分の見聞を利用して、更に新らしい機械を作つた。その構造は今日用ひられてゐるものと殆んど同様だ。然し私が自分の發明を完成したのは、一七八七年の事であつて、その時私は織機の最後の特許を得た。それは同年の八月一日であつた。』

動力織機が發明されたにも拘らず、手織は以後五十年間も、なほ行はれてゐた。然し終には競争に敗れて、漸次に廢つてしまつた。一八三三年には、動力織機はまだ二、四〇〇臺しか用ひられてゐなかつたが、一八三三年には一〇〇、〇〇〇臺以上に達した。その他紡いだり織つたりする作業の小さい部分にも、機械の發明が絶えず行はれた。多軸紡績機や動力織機にも始終改良が施され、終に今日に到つたのだ。余では昔

ランカシア地方の職工が總掛りでやる程の仕事を、廿五人の職工が極めて完全な機械一臺を動かしてやり終せるのである。

一七八三年にはベルのシリンドル式捺染機が發明されて、二百人の大人と子供でやつてゐた仕事を、僅か一人の大人と一人の子供でやれるようになった。また木綿の漂白剤が發見されて、數ヶ月も掛つて日光で漂白してゐたものを、數日間でもやれるようになった。

今度は如何にして、莫大な原料の需要に應ずべきかといふ問題が、アメリカの綿花栽培者の間に起つて來た。多軸紡績機が用ひられるようになったからは、仕事は幾倍にも殖えた。所が黒人の女が一ポンドの棉の實を抜くのに、丸る一日掛つてゐた。よく働らく熟練した男でも、一日に五ポンドか六ポンドしか出來なかつた。だからとても紡績業者の需要に應じ切れなかつた。その頃南部で法律を學んでゐたエリイ・ホイットニーといふ若い米人が、綿花栽培者の困難を見て、友人のすゝめるまゝに綿繰

機械の發明に取り掛つた。彼はエール大學卒業前に、手で釘を作る事に専心してゐたが、非常に其の技術に上達したので、一年足らずの中に、彼の謂ゆる『鋸式綿繰機』を完成することが出來た。此の綿繰機械は實際に使つてみると、非常に成績がよかつた。一日に千ポンドの綿花を樂に仕上げる事が出來た。そして綿花栽培者は、最早や紡績業者の注文に苦しめられぬようになった。

今日では、綿花が野原に栽培せられ、立派な綿となつて紡績業者の手に渡る迄には、色々な機械に掛けられ、殆んど人間の手を煩はさぬようになった。

第四節 蒸汽機關の發明

斯ように機械が諸方面に用ひられるとなると、之を運轉する動力が必要になつて來るのは、自然の道理である。ハーグリーブズやクロムプトンやアークライト等が新しい織物機械の發明に熱中してゐる一方には、他の發明家は、動力の問題で頭をなや

ましてゐた。かくして織物機械の新しい發明と共に、無限の勞働力を有する驚くべき蒸汽機關が發明されたのである。

こゝに蒸汽機關の發達の歴史を詳しく説明し、その機械的原理を述べることは不可能であるが、二三の點について言つて置かねばならぬ事がある。それは水蒸氣の膨脹力は、近世になつて初めて發見されたものではなくて、ずつと昔の人達にも、既に知られてゐたといふことである。

紀元百年前、アレキサンドリアの博物館には、反作用で動く一つの蒸汽機關の模型があつた。之は明らかに、紀元前から水蒸氣の力が知られてゐたことを示すものである。成るほど昔の人達は、長い間理論的な形而上學的な理屈にばかり氣をとられてゐたので、斯ような實際的な知識は發達してゐなかつたが、吾々は歴史の此處彼處に、水蒸氣の力が知られてゐたといふ形跡を認めることが出来る。

蒸汽機關が初めて實用的になつたのは、一六九八年であつた。即ちその年トーマス・

サヴァリイが鑛山の水を吸ひ上げるポンプに蒸汽機關を据えつけて、その特許を受けた。この發明は間もなくニューコーメン、ベイトン、スミートンによつて相ついで改良せられ、且つ新しい原理が採用された。然し機關が粗雑で幼稚なので、石炭が非常に多くかゝつた。従つて工場で用ひるのには、不經濟であつた。

第五節 ヲットの發明

現代工業の動力を革命した比較的經濟的で實用的な蒸汽機關の發明は、ゼームズ・ワットに負ふところが多い。この偉大な發明家は、一七三六年にグリノックに生れた。父は小さい商人であつたが、幼い時商賣に失敗したので、ゼームズは少年の頃から自らパンを獲なければならなかつた。彼は機械の事に興味を持つてゐたので、初めロンドンに行つてモルガンといふ人の徒弟となり、器機製作の理論を學んだ。こゝでは僅か一年ゐたが、彼はスコットランドに歸り、グラスゴー大學の友人を求めて、

その天文部に使ふ機械の修繕係りとなつた。その後、彼は自分で店を開かうとしたが、町のギルドは彼の徒弟年限が短かいといふので、その加入を拒んだ。そこで大學は、彼を拾ひ上げて數學用の器械の製作者たる地位を與へた。さうしてゐる中に彼は一日大學に居る友人と議論をした。議論の中心になつたのは、當時鑛山で用ひられてゐた古い厄介な蒸汽機關であつた。それは修繕のために大學へ委託されて來たのであるが、誰も直す者がなかつた。ゼームズは修繕が出來ると云ひ、友人は駄目だと云ひ張つたのである。

ところが一七六五年の夏の或日のこと、彼がグラスゴウの芝生の上を歩いてゐた時、ふと修繕の方法に就いて一つの考へが頭に閃いた。併し資金が足りなかつたので、思ふ様に行かなかつた。そこで色々工面した揚句、パーミムガムのマシユー・ポールトンと協同してやることになつた。

一七六八年、彼はパーミムガムに居を構へた。そして何年もの間、蒸汽機關の改良

に没頭した。改良が行はれるごとに、彼は一々特許を得た。一八一九年、彼は靜かに瞑目した。そしてハンズワスの教區墓地に埋められた。

彼の生活と事業とは、觀察と注意と實驗とさへあれば、どんな難問題にぶつ突つても、之を解決し得るといふ大きな獎勵を與へるものだ。

一七八六年には、蒸汽力が實際に用ひられるまでになつたが、それが綿絲工業に應用されたのは、一七九五年のことであつた。それ以來、蒸汽力は工場の無数の車輪を廻はすようになつた。そして現今では、電力とか石油とか、色々強い競争者が現はれてゐるが、かの疲れを知らない鐵の馬は、長い間、産業界を濶歩してゐたのである。

第六節 鐵 工 業

産業の發達と人間の力を擴大する上に鐵が必要なことは言ふまでもない。その性質が柔軟なこと、鍛へ易いこと、強いこと、應用の方面の廣いことなどは、鐵をして機

械的生産の發達に缺ぐべからざるものとした。

鐵は昔から用ひられてはゐたが、鐵工業に至つては、比較的進んでゐなかつた。十八世紀の初め頃にも、製鐵の方法は極めて幼稚であつた。然し手工業が衰へて機械工業が起り、機械が手の道具に代り、蒸汽機關が一般に用ひられるようになってからは、鐵の需要は急に高まつた。そして人々の注意は、製鐵方法の改良に集中された。昔から鐵工業の中心は、主としてイングランドの南部であつた。然し十八世紀の半頃からは、コールブルックデールが重要な中心となつた。

昔は鐵鑛を溶かすのに木材を用ひたので、燃料を得るのはなみ大抵ではなかつた。従つて事業の發展を妨げることが多かつた。一七五〇年頃からは、石炭の使用が有效になつたので、製鐵業は忽ちにして急速な進歩を遂げた。

昔は風を送るのに、巨大なホイゴを幾對もつけ、之を手や水力や馬の力で動かしてゐた。之は實に原始的なやり方であるが、一七六〇年にスミートンのシリンダー送風

機が發明され、從來のホイゴに代つて用ひられる様になつた。これもまだ送風が不規則ではあつたが、それにも拘らず、間もなく一般に用ひられるようになった。

一七九〇年、蒸汽機關が原動力として用ひられることになつてから、初めて送風が確實になり、繼續的になつた。一七六六年から一七八四年の間に、展鐵の方法と鑄鐵を鍛鐵に變へる方法とが、非常に進歩した。一七八三年にはハンマで打つ代りに、重いローラを廻して溝を作る方法が行はれた。そして間もなく精鍊法が發明された。

一八二八年、グラスゴー瓦斯會社に雇はれてゐたゼームス・ネイルソンは衝風爐に送る空氣は冷たいのよりも熱い方が得策であることを發見した。そこで假りに製鐵工場を試みたところ、彼れの方法によると鑄鐵一噸の製出に就き、石炭三噸近くの節約が出来ることが分つた。之は製鐵業に取つて一大福音であつた。一八四二年には汽槌が發明された。一八六五年にベセマー法が發明されて、溶解した鑄鐵を、溶鑛爐から直接に鋼鐵に變へることが出来るようになった。

その他燃料を要せざるシーメンズ再生爐、製鋼用ガス發生機などが現はれ、大規模の鑄造や精鍊に機械を使用すること、碎いた鑛石から鐵分を抽き出すのに電氣を利用することなど、大小の發明改良が續出して、鐵工業は、空前の發達を遂げた。そして機械發明の進歩に必要な材料の製出方法も革命された。自然の無限の牽引力を働かす莫大な鋼鐵も、今日では樂に製出されるのである。

第七節 製靴業、裁縫業、農業

昔は靴屋は、自分で皮革を買つて來て、自分の手で色々なに切り抜いたり、縫ひ合せたり、釘を打つたりしたものである。それには二三の簡單な道具を用ひてゐた。ところが二十世紀の初め頃になつて、發明家達はこの重要な工業に注意し出した。間もなく色々な機械が發明され、その應用によつて、製靴業はすつかり革命されてしまつた。

『靴底や踵を打ちつけるのに、簡單な機械を用ひ初めたのは、一八〇九年からである。それ以來、發明が相繼いで現はれ、純粹な手工業であつた製靴業も、全く進歩した機械工業に變じてしまつた。』

アメリカ合衆國では一八八一年頃、既に五千萬足以上の長靴や短靴がブレイク・マツケイ機によつて縫はれてゐた。今日製靴工場を覗くと、次の如き澤山の機械が廻轉してゐる。先づ皮革を適當な形に切り取る機械、靴底を押しつけるローラ、靴底や踵を切り抜く機械、型をつけ髷をつける機械、面皮の型をとる機械、面皮を組み合はす機械、孔を穿つ機械、靴型に合はす機械、奇麗に切り込む機械、剃ぎそぐ機械、砂紙をかける機械、磨く機械、スタンプを押す機械、木釘を作る機械等である。』

よく設備の行き届いた衣服工場には、布を切り取り、縫ひ合はせ、ボタンの孔を抜き、ボタンを縫ひつけるなど、色々な機械が廻つてゐる。

農業の方面も機械化された。今日進んだ農業國では、收穫時に鎌や大鎌や熊手を用ひる者はない。連枷なんかは、殆んど忘れられた古代の遺物のような觀がある。今や蒸汽鋤や、草刈機や、自動束禾機や、牧草乾燥機、その他無数の機械が百姓の仕事をやつてゐる。進歩した現代の脱穀機は、自然にモミを喰ひ込み、藁を噛み切り、穀類を量つて自動的に俵に詰め込む。そして藁は別に積み重ねる。側についてゐる者は、一寸を貸せばよいのである。

斯ように鋼鐵と蒸汽力とは、有ゆる産業に浸み渡つた。どんな工業でも、機械化された。機械的發明は實に不思議なほどであり、機械の應用は隈なく行き渡り、人は破竹の勢ひで自然の力を征服しつゝある。そして、たゞに生産の方法が革命されたばかりでなく、生産増加の可能性も、殆んど無限に開られて來たのである。

第八節 分配方法の革命

生産方法の驚くべき革命に伴ふて、分配の方法も、同じく驚くべき進歩を見せた。ランカシャ地方の綿絲紡績のように集中化した産業は、世界的な市場がなければ立つて行かぬ。即ちその無限の製品を、世界の各地に賣捌かねばならぬ。そのためには、完備した運輸機關が必要である。かくして商工業の發展に伴ひ、運輸機關を完備しなければならぬ必要が起つて來た。運河や、乗合馬車や、荷車や、荷馬車や、上荷船なんかでは、もう間に合はぬ。それに運搬に何日も何日も掛るようでは、毀はれ易い商品は堪つたものではない。

昔から、蒸汽力を運輸に應用しようといふ企はあつた。一七六九年頃、既に一人のフランス士官が蒸汽で動かす車を造つて、運轉したことがあつた。それから十五年経つて、ワットの助手だつたマードックも同じやうなのを作つたことがある。是等の汽

關車は、普通の街道を走るように作られてゐた。ところが道路が悪いから、うまく走
るようになるために、車輪の通る所へ木や平たい石を並べて敷かねばならなかつた。

其の後正確な幅の鐵道を敷き、車輪も丁度之に合ふようなものを特に作ることにな
つた。一八〇一年にワズワスからクロイドンまでの鐵道馬車の特許が下りた。ワツ
トの作つた蒸汽機關の進歩したこと、殆んど通れないような道に鐵道を敷いて、重い
荷物の運搬を易くしたこと、この二つは當時の發明家にとつては、汽關車の發明を助
けた主な原因である。鐵道の上で重い荷物を引張るのに、初めて蒸汽力を應用した名
譽は、普通スチヴンソンに屬するやうに思はれてゐるが、實はリチャド・トレヴィシ
ックのものである。彼は一八〇四年に一つの機關車を造り、ウエルシユ・ベニイ・
ダーラン街道の上で運轉させた。一八〇八年、彼はロンドンに鐵道を敷いた。しかし
此の試みは不幸に終つた。彼れの機關車は、數週間首尾よく運轉してゐたが、或る日
のこと、偶然に脱線した。そしてこの貧乏な發明家は、終に之を修繕すべき資金を持

つてゐなかつたので、その實驗を續けて行く事が出来なかつた。

第九節 チョーヂ・スチヴンソン

ヂョーヂ・スチヴンソンはワット、トレヴィシック、その他の發明家が殘した仕事を基
礎として、初めて實際的な成功の榮冠を得た。彼は一七八一年に生れた。彼の父はニ
ユーカツスル近邊のある炭坑に雇はれてゐた吸上ポンプの火夫であつた。だから貧乏
のために、その子に適當な教育を授けることが出来なかつた。ヂョーヂは小さい時分
から、機械の組立に強い興味を持つてゐた。初め彼は雇はれて牧羊者となつたが、段
々色々な職業を経て、遂に炭坑の機關係りとなつた。

當時はワットとボルトンが蒸汽機關を發明して世界を驚嘆せしめてゐた頃とて、彼
は蒸汽機關のことに就いて、もつと知り度いといふ欲望に燃えてゐた。然し彼は本を
讀むことが出来なかつたので、十八歳の時から、夜學校に通ひ初めた。

其の後彼は一人の炭坑主の援助を得て、謂ゆる『旅行する機關』を造り上げることが出来た。之はその炭坑から、九哩離れた海港までの軌道を走らすためであつた。彼のこの發明は、一八一四年に實際にやつて見たが、非常に成績がよかつた。そこで彼は勇氣を得て更に改良を加へ、一八二二年には、ストック・ダーリングトン鐵道の發起人を説得して、血と肉の馬に代へるに、彼れの鐵の馬を以つてすることを謀つた。その結果一八二五年には、鐵道が完成して、乗客も貨物もその上を運搬されることになつた。斯くて現代の鐵道制度が初まつたのである。

學者でしかもスチヴンソンの友人であつた一人の批評家が、當時のことを『クオータリー・レビュー』にかう書いてゐる。『機關車でもつて乗合馬車の二倍も速力を出さうなんて、こんな馬鹿らしい、途方もない考へがあるものか』。

學者がこんな風に嘲笑したり、失敗を豫言したにも係らず、鐵道會社は續々と組織されて、やがて高速度の運輸の時代が初まつたのである。

第十節 汽船の發明

蒸汽力で航海しやうといふ問題も、決して見逃すことが出来ぬ。十七世紀の終りも近い頃、バビンは舟を進める水掻車をピストン・エンヂンで廻轉しようといふ計畫を立てた。そして一七〇七年、彼はカッセルのフルダ河に模型の小舟を浮べて、實際に蒸汽を應用してみた。十八世紀中、アメリカやイギリスの發明家は、熱心にこの考案を進めた。一七三八年、ジョンサンハルは蒸汽力を船の推進に應用する特許を、イギリスで受けた。アメリカ合衆國では、ヘンリーとフイチが蒸汽力で航海の出来ることを證明した。然し是等の發明家の、一世紀もの努力を立派に完成したのはロバト・フルトンであつた。一八〇七年の春彼れのクレアモント號が進水した。そしてその秋には此の新らしい『海上の怪物』は、アルバニイまでの試航海に成功した。

一八一九年、アメリカの汽船サヴァンナ號はデヨルチャのサヴァンナ港を出帆し、

イギリス及び北ヨーロッパの各港を経てペテログラードに到着した。之が大西洋を横切つた最初の航海である。サヴァンナからリバプールまでは大した困難もなく、二十五日で行けた。今や貨物船と客船とは、世界の主要な港を、日々頻繁に往來してゐる。斯うにあらゆる方面に自然の力が利用されるやうになつた。自然の力は長い間、唯だ人間が喚び醒ますのを待つてゐた。彼は人間が、科學と發明とに、熱心になるのを待つてゐた。今日では四十萬哩以上の鐵道が、多くの國々や大陸を結びつけてゐる。世界の端から他の一端までへは、ほんの数日の旅行で行ける。大きな大洋通ひの汽船は、六日足らずで大西洋を横斷する。リヴァプールからサンフランシスコまでは僅か十日の愉快な航海ですむ。

また電氣の利用も素晴らしい。それは海をくゞり陸を渡つて、吾々の通信を傳へる。そして夜を晝に變へる。

これ等の發明や發見を通じて、吾々は微妙にして聰明な人間の頭腦が、自然の神秘な力をあばいて、自分の思ふがまゝに使つてゐることを見るのである。

第十一節 發明の内面的歴史

機械的發明は、一二の天才によつて、突然成されたものではない。それは多くの人の頭腦から頭腦へと、徐々に發展して來たものである。吾々は前節までに於て、その經路の大略を述べて來た。これは發明の歴史に於ける、謂ゆる『偉人説』を打破するものである。成るほど特別の技術を持つて生れた發明家も尠くない。然しこの技術も、彼等がその選んだ仕事の上に積み上げられた過去幾世紀間の知識を土臺として、研究し應用したからこそ、初めて役に立つたのだ。そして又、同じ問題にぶつかつて行き悩んだ先人の企畫や、過失や、誤りや、成功を利用し參考にしたからこそ、初めて役に立つたのである。今まで述べて來た大發明の中、一つとして、唯だ一人の發明家とその全部を仕上げたやうなものはない。ホツヂは一八五七年、或る委員會の席上で、

斯く述べてゐる。『今日吾々の使つてゐる紡績機械は、恐らく八百の發明から成り立つてゐる。そして今日の梳綿機は、約六十の特許から出來上つてゐる』。

吾々が機械發明の内面的歴史に眼を轉するならば、大進歩の秘密はた易く分る。既に述べたように、どの機械の方面にも、澤山の働き手がゐて、互ひに援け合ひ、勵まし合ひ、そして何等かの新らしい事實を次代の後繼者に渡してゐる。ポール、ワイアット、ケイ、ハーグリーブズ、アークライト、クロムプトン、カートライトは、紡績の問題を研究した。バビン、セイヴァリイ、ニューコーメン、ベイトン、ワット、其他歴史に現はれない多數の人々が寄り集つて、蒸汽機關を完成せしめたのである。偉人説が何と言はうと、吾々はスペンサーの次の言葉を信せざるを得ぬ。

『若しその社會に、過去から受けついで物質的精神的財産がなかつたならば、どんな人だつて無力である。また共存せる人々や、品性や、知識や、社會的施設から、全く離れてゐては、どんな人だつて無力たらざるを得ぬ。例へばこゝに、シエクスピヤが

居るとしよう。若し昔から傳つた豊富な經驗が彼れの思想を豊かにせず、また長い間の使用によつて進歩し豊富になつた言語がなかつたならば、また若し文明生活の色々な遺産がなかつたならば、彼はどうして劇を書くことが出來たらう。假令ひ彼に天稟の才能があつても、材料がなかつたならば、何にもならぬ。假りにワットが、鐵のことをちつとも知らぬ民族か、手押しのファイゴを使つてやつと熔かせる程の少量の鐵しか得る方法を知らぬ民族か、若くは旋盤さへもない時代の中に生れたとしたならば、彼がどんなに發明的天才を持つてゐたにしても、蒸汽機關のことなんか考へる機會がないではないか。』

吾々はカーライルの『人が人に與へる援助は無限であり得る』といふ言葉を更に擴張して、社會が人に與へる援助は無限であり、また人が社會に與へる援助も、無限であり得ると云ひたい。

第十二節 産業革命の経済的方面

今まで調べて来たのは、産業革命の機械的方面である。今度は数字に現れた経済的方面を調べよう。それは單に、生産された物品の噸數を示すだけでは面白くない。それは産業革命前後に於ける、人間の生産力の、相對的な増大を示すものでなければならぬ。問題は生産力の増大といふ點にある。之に就いてサーストン^{Saunders}は斯う言つてゐる。『人類の進歩は、生産力の如何に懸つてゐる。より大きい仕事をなし、より少ない時間と精力とで生活必需品を供給し、各種の思想や、發明や、知識の發展に必要な餘暇を造り出すことに懸つてゐる。』

商業の發展と工業の進歩とは、次章に述べる如く、社會の構造をも一變してしまつた。今その實況を示すには、どうしても二三の統計を擧げなければならぬ。

織物業の方面では、機械を用ひるようになってからは、製品の出來高は破竹の勢ひ

で増加した。一七六四年にイギリスへ輸入された綿花は、三、八七〇、三九二ポンドであつた。一八四一年にはそれが四八九、九〇〇、〇〇〇ポンドに昇つた。一七九二年にアメリカ合衆國からランカシャだけに輸入された綿花は一三八、〇〇〇ポンドであつたが一八〇〇年には一八、〇〇〇、〇〇〇ポンドになつた。一八〇〇年にブラックバーンの市場で賣捌いた更紗の量は、百萬反に達してゐた。それから七十七年後の一八七九年には、織物類の輸出が殆んど四十五億ヤードに達した。固より之は、内地で消費したもの以外である。

一七九〇年から一九〇〇年までの十年間に羊毛の輸入は、二、五八二、〇〇〇ポンドから八、六〇八、〇〇〇ポンドに増加した。一七八八年、鐵の產出量は六一、三〇〇噸であつたが、一八三九年には、一、三四七、七九〇噸になつた。クロムプトン^{Crompton}が紡績機を發明した百年後には、ランカシャの地に二、六五五軒の工場が建ち、四六三、一一八臺の動力織機と三七、五一五、七七二本の紡錘が廻轉して居つた。

官邊の計算によれば、一七九三年から一八一五年の二十二ケ年間に、輸出總額は、一七、〇〇〇、〇〇〇磅から五八、〇〇〇、〇〇〇磅に上つた。

是等の數字は、機械の大發明以後に起つた産業の大變化を示すものである。

さて今度は、個人一人に就いての、生産力の増加を調べて見よう。言葉を變へて言へば、社會全體の生産力は人口の増加に比して、どれだけ速やかに増大したか。生産力も大きくなつたが、その間に人間も殖えた。生産力の増大と人口の増加の比例はどんなものであつたか。これは實に肝要な問題である。之によつて現今の勞働者の生活狀態もはつきり分つて來るし、生活の必需品や享樂物の生産は、どの位まで増大する見込みがあるかといふことも分つて來る。然し不幸にして、古い統計がない。分つてゐるのは、皆な近年のものである。で止むを得ず今世紀の初頭と、最近の狀態とを比較する外はない。

ハーグリーブスが作つた多軸紡績機械には、初め八本の紡錘しかなかつた。それが次

第に増して百二十本になり、今世紀の初め頃には、二百本になつてゐた。ところが今日では、一臺の紡績機に、千本以上の紡錘が附いてゐる。そして一分間、一萬回の速度で廻轉してゐるのである。五十年前では最も進歩した動力織機でも、梭の行程が一分間百回位であつた。今日では最も高速度の動力機械は一分間に四百回も梭を動かすことが出来る。そして機械の生産力が増加するに伴れて、作業中の人間の勞働量は益々少なくなつた。一八一九—二一年には、一人の生産力は絲の方面では九六八ポンドであつた。一八八六—八年にはそれは五、九〇〇ポンドになつてゐる。かくの如く織物機械の生産率は空前の進歩を遂げた。それ故一人の職工が働けば、二百十五人に綿織物を着せることが出来るし、毛織物ならば、三百人は遊んでゐて着られるのである。どの産業の部門でも、生産力の増加といふことが注意の中心になつた。その結果、殆んど不思議な位の好成績が得られた。一八七〇年、コロニーニユ大伽藍の建築中、二人の人が起重機を使つて石を持ち上げたが、之は中世時代ならば三百六十人の人が掛

つてやる程の仕事であつた。昔の靴屋は、一日に精々長靴二足しか作れなかつた。今日の職工は、最良の機械を用ひれば、一日三百足は優に作り得る。今日は六人の労働者が一年働けば、一千人の人が一年間食べるだけのパンを造ることが出来る。しかもこの六人の仕事は、土を耕して小麦を蒔くことから、之をパンにして消費者の手に渡すまでの總ての労働行程を含んでゐるのである。

人間の生産力は、機械の進歩によつて之ほどまでに増大した。それでは一般労働者の生活も、之に準じて向上したであらうか。

今日、現代的な設備を有し、普通の家族を容れるような一軒の家を建てようと思へば、一人の人が一年八ヶ月間働くだけの労働力があればよい。ところが一般労働者は、毎年三ヶ月分の労働力を、家賃として支拂はねばならぬ。しかもその家は生涯自分の物にはならぬ汚ない家なのである。そのために死ぬまで、三ヶ月分の労働を割いて行かねばならぬ。また今日、工業の進歩した國では、三ヶ月分の労働で一家族一年分の

食料が作れる。然るに一般の労働者は、一年分の食料それも極くお相末な一を求める爲めには、半年分の賃銀を投げ出さねばならぬ。之によつて見ると、社會の生産力は非常に進歩したが、そのお蔭を蒙むる者は、社會一般の人々ではなくて、少數特權階級のみであること、一般労働者の生活は、少しも樂にはなつて居らぬことが分るのである。

第十三節 機械の代用と手の労働

産業の進歩は、動力の應用如何にかゝつてゐる。動力は、それが何の動力であらうと、全く同じ性質のものである。人間または動物の筋力であらうが、急速に廻轉するモーターの力であらうが、一向差支へない、力でありさへすればよい。どんな力だつて、力に違ひはないのである。そこで問題になるのは、世界の動力は人口の増加に比して、どの位の速さで増大して來たか、といふことである。動力増大と人口の増加と

の割合は、何程であらうか、これが肝要な問題である。

一八三一年以來、文明諸國の人口はまだ二倍にも達してゐない。然るに動力の方面では、蒸汽力だけでも一八四〇年以來、一、六四七、〇〇〇馬力から五五、五八〇、〇〇〇馬力以上に昇つてゐる。マルホールは次の如く云つてゐる。

『僅か半世紀足らずの間に、諸國民の勞働力は、ヨーロッパに於ては三倍になり、アメリカ合衆國では八倍に増加した。キリマト教國だけを取つて見ると、平均一國民の精力は、一八四〇年に比して二倍以上になつてゐる。即ち今日五人の人は、五十年前、十一人の人がするだけの仕事を爲し遂げることが出来るのである。』

アメリカ合衆國の勞働委員の報告によれば、一八八六年には三、五〇〇、〇〇〇馬力に相當するだけの機械が合衆國にあつた。若し之れだけの動力を人間の力で出すとすれば、二千萬人を要するに違ひない。然し當時の機械では、四百萬人しか要らなかつた。即ちその差、一千七百萬馬力だけの動力は、當時の機械が引受けてゐたことにな

る。

一八八六年に合衆國で動力機械及び鐵道運輸に依つて成されてゐた仕事を、全部人間だけの力でやるとすれば、一億七千二百五十萬人は要るであらう。そして當時、合衆國全體の人口は六千萬人に達せず、所要の人數の三分の一そこらにしかないことになる。即ち残りの三分の二は、機械がやつてゐた譯である。

斯ように機械は、人間に代つて勞働するのである。それでは此の疲れを知らぬ自然力は、どの程度まで、人間の手の勞働に代り得るかと云ふに、それは機械を造り、之を改善する人間の能力に比例するのである。人間の能力が進めば進むほど、機械の應用が廣くなり、従つて手の勞働は少なくなる。だから機械の進歩といふことは、人間の精神的進歩を知るに適當な材料となる。

田を耕やすことも、種を蒔くことも、收穫することも、穀物を市場から市場へと運ぶことも、又は、布を織ることも、上衣を縫ふことも、みなこれ結局、物に力を加へ

る事である。そして今日までの發明から考へて見ると、人間の仕事の代りをする、無盡藏の自然力の使用法には、限りがないように思はれる。とても自然力では駄目だと思はれるような、細かい複雑な仕事でも、どん／＼やつて行く機械が次から次へと現はれた。

過去を振り近つて見ると、ずつと昔は、人は哀れな筋肉の力のみで、やつと生活を支へるほどのものを得て居つた。その頃の、彼等は食つたり着たりするだけが精々であつた。然しながら今日はどうであらう。更に數百年後はどうであらうか。機械は極度に進歩し、生産力は無限に増大するだらう。人は衣食のためには、ほんの僅かしか働かないでよい。そして餘る時間と無限の精神力とを、自由に人生を豊富にし、擴張し、大きくする事に用ひるだらう。今日のように兄弟が造つた富をもぎ取るために、相争つたりはしないに違ひない。人は皆な協力し組織されて、無限無盡藏の自然の寶庫から、生活資料を取るために協同して働くだらう。

？

『日々のパンが確實なのだから、金が幅を利かすようなこともない。そして人生は、眞に生きるがための人生であつて、食はんがための人生ではなくなるであらう。』これは單なるユトピアの夢ではない。科學と機械の完成にもとづく、確固不拔の基礎の上に建つたところの理想である。

第十五節 農 業

元來、人間は土地とは離れ得ぬ動物である。その食物の大部分は、土地から取らねばならぬ。それにも拘らず、農産物の增收といふことに就いては、比較的注意が拂はれてゐない。尤も勞力を省くために、多くのよい機械が使はれるようになったのは事實である。けれどもその割合には、農業物は増してゐない。

イギリスでは製業者や商業が急に發達したが、農業は事實、衰へる一方である。成るほど、耕地は一八四六年以來、三、〇〇〇、〇〇〇エーカーだけ増したが、實際收穫

の出来てゐる土地は、二一、九〇〇、〇〇〇エーカーから二〇、五〇〇、〇〇〇エーカーに減じた。これは土地が疲弊したからでもなく、また生産力が行き詰つたからでもない。イギリスが工業に熱中して、農業の方面を閑却したからである。然り。

ヨーロッパ全體から見れば、一八四〇年から人口は四割四分殖えたが、穀物とか肉類とかの食料品の産出は、五割七分増してゐる。けれどノルドウはかう云つてゐる。

『若しヨーロッパの土地を、支那のように耕やしたならば、優に十億の人口を養ひ得るに違ひない。然るに今日では、三億一千六百万人の人を充分に養ひ得ないで、毎年數萬の移民を世界各地に送つてゐるといふ有様である。』

工業熱に對する反動は、既に起りかゝつてはゐるが、然しギビーズも云つた様に、地代が高くなつてゐるから、集約農法も行はれ難く、收穫地の増加も思ふようには行かぬ。『文明のお極まり文句』の中に、次の様な辛辣な言葉があるが、眞を穿てりと會ふべきだ。

『ヨーロッパの工場で働いてゐる職工は、コンゴ河畔の黒人奴隸と異らぬ。彼等は悪いウイスキーで飢えを鎮め、生涯、工場の腐つた空氣の中で暮らす。そして肺病になつて死んで行くのだ。そのお蔭で他の野蠻人―株主や金持ち―は愉快な生活をしてゐる。この狂氣じみた熱病―それは食料品の生産に向けられないで、工業的な商品の無暗な製造に向けられる―は終には一國を擧げて、飢えた金袋にしてしまふに違ひない。さうなれば、どんな小さい家にも最新のピアノが据えつけられ、人は皆、出来立てのさらさらした衣物を着てゐるだらう。然しながら、その骨には、病氣が巢喰ひ、血管には一滴の血もなく、肺には結核菌が一杯詰るに違ひない。』

第三章 舊制度の崩壊

第一節 工場制度

前章では十八世紀中葉のイギリスの状態を述べ、生産と分配の方法をすつかり一變してしまつた機械の發明に就いて、簡単な説明を試みた。次に述べようと思ふのは、産業組織と經濟思想に現れた變化である。この變化は、社會の經濟的基礎が急激に變化した爲に起つた變化である。

第一章で述べたやうに、昔は職人の家が即ちその職場であつた。紡いだり織つたりするのは、資本家的雇主の下で働らく職工ではなく、職人の家族の者か、またはほんの二三の雇人であつた。職人は大抵、機械を持つてゐて、自分で原料を買入れたり、製造品を賣捌いたりした。一人の主人の下で數人の者が働いてゐる場合にも、今日の

ような、はつきりした分業はなかつたものだ。

製造業者は、一群の職人と數名の徒弟を雇ふてゐた。徒弟の數は、職人の數に比例するように法律で決まつてゐた。だからどの職業の雇人も數に應じてそれ／＼平均が取れてゐた。そして機械が用ひられて突然解雇されることもなく、年々同じ習慣許りを繰返へし、ちつとも生活振りを變へることがなかつた。雇主と雇人の間柄は大抵七年を期間とする徒弟時代に始まつて、一人前の職人として終るまで續くのであるから、自然に家族のような關係が出来た。そして互ひに個人的に知り合ふから、互ひに尊重し合ふのが常であつた。時には利害の衝突から不和になることもあるが、大抵は圓滿に行くやうに、うまく利害を調節してあつた。

然し手工業者は到底新しい、疲れを知らぬ機械と競争することは出来なかつた。機械の發明と共に工場制度が起つた。これによつて生産力は驚くべく増加した。それには機械の援けもあつたが、分業と、分業に因る労働者の技術の進歩も、見逃す譯に

は行かない。かうして家内工業や手工業は次第に倒れて、工場制度に變つて行つた。手工業者は生産の全行程を初めから終りまで、自分一人の手でやつてゐたが、今や組織された労働者群が、分業によつて幾組にも分れ、或る商品の一部分づゝを次から次へとやつと行くやうになつた。』ホブソンの言葉を引くと――

『生産の單位は最早や一つの家族でもなく、小さい一群の人々でもない。そして二三の安價な簡單な道具を以つて、僅かな原料を取扱ふのではない。それは數萬の人々が高價で複雑な澤山の機械によつて協同し、絶えず莫大な原料を精製して、社會全體の消費者に送り出すのである。』

「産業革命の初期には、新らしい機械を持つてゐた人々は非常な得をした。當時まだ工場法が發布されてゐなかつたし、輿論にも制限されなかつたので、彼等は思ふ存分それを利用することが出来た。彼等は労働者に長時間のひどい労働を強ひることが出来た。斯ように、一人の資本家が莫大な労働者群を、自分の支配下に集めるようにな

つてからは、昔の親方と職人といふ暖かい個人的な關係は破壊されてしまつた。そして社會は、『金錢關係によつてのみ』つながられた雇主と雇人といふ二つの階級に、次第に分裂して來たのである。』

市場は次第に擴がり、商品の需要は漸次に大きくなつて、莫大な資本の必要が起つた。そして資本は次第に、労働よりも、有力になつて來た。昔は道具と云つても簡單だし、設備も殆んど要らず、やり方が小さいから原料も僅かですんだ。だから資本はさう要らなかつた。それよりも労働力の方がずつと大切だつた。そして労働力を持つて居る者は、さまでの困難なしに資本を手に入れることが出来た。ところが工場制度になるとその反對である。機械を買つたり、工場を建てたり、澤山の職工を雇ひ、莫大の原料を買占めるに、多くの資本が入用である。資本を持たぬ者は、折角労働力を持つてゐても、この労働力を應用する譯にゆかぬ。

手工業者は、工場制度と競争が出来なくなつた。工場では一時に澤山の品物が、非

常に安く作り出されるのだから、とても之と競争して行けない。それかと云つて新しく工場を建てるには、莫大な資本が要る。かくて彼等は止むを得ず家内工業を打ち棄て、雇人の階級に落ち込んで行つた。そして仕事のない場合には失業者とならねばならなかつた。

新らしい機械が用ひられると共に、多くの手工業者は、忽ち職を失つてしまつた。女や子供でも、男のしてゐた仕事が出来なくなつた（機械の番ぐらひは誰にでも出来る譯だ）あらゆる階級の労働者は、資本家の雇主に頼らねば食へなくなつた。そして前代未聞の激しい競争が行はれるようになった。

工場制度によつて、労働が省けるようになった。然しそれによつて労働者は、少しも利益を受けはしなかつた。のみならず多くの害毒を流すようになった。それは機械に罪があるのではなく、之を悪用したからだ。機械が社會一般の幸福のために用ひられるのではなくて、一個人の資本家の營利のために用ひられるからである。

第二節 資本主義の勃興

「資本主義の勃興はまた新制度の特徴であつた。それと共に古い中世時代の窮屈な制限の多い商業は倒れて、無拘束な個人主義の時代が來た。」

こゝに資本の意味をはつきりさせておきたい。それも古典經濟學者が試みたよりな、形而上學的な七面倒臭ひ定義は止しにして、手取り早く分るようになりたい。

それにはホブソンの説明が一番分り易い。彼は云ふ。具體的な資本の形は、先づ生産物の原料である。その中には、既に加工されたる物品も含まれてゐる。次には、生産に必要な建物や機械である。これにも取引に必要な用具が含まれてゐる。即ち資本とは、一口に云へば、生産機關である。

それ故資本主義の勃興とは、一個人なり會社なりの手に、商品の生産に必要な資金や工場や機械や原料や既成品等が集積されることを云ふのである。

産業革命前には、會社は殆んど自給自足であつた。そして家内工業者間の競争も、非常に制限されてゐた。工業によつて莫大な富を積み上げるなど、云ふことは、誰も知らなかつた。そして工場制度の起る前には、資本と云つても、ほんの僅かで充分だつた。古い家内工業時代には、機械といふ機械も要らなかつた。それよりも職人の腕前——労働が、ずつと大切だつた。ところが工場制度が起つて、事態は一變した。労働者より資本の方が、次第に重要になつて來た。新らしい産業組織に伴ふ激しい競争に堪えて行くには、立派な機械や、多量の原料や、莫大な出費に堪へる資金が必要であつた。産業革命前には、富は農業と商業と、當時存在してゐた幼稚な工場とから得られてゐた。かうして金が可成り蓄まると、新らしい機械を買入れて、工場を建てて者が出來だした。彼等は機械を利用して、一時に多くの商品を、安く造り出すようになった。そして大成金になつて、他人の生活に、殆んど無限の權力を振ふようになった。

之に反して資本を持たぬ手工業者は、到底、組織的な機械工業と競争して行けないので、段々賃銀労働者に成り下つて行き、全く雇主に頼らねば食へなくなつた。當時まだ工場法の規定がなかつたから、雇主は勝手に労働者を苦役することが出來た。賃銀はやつと命をつないで行くまでに下げられた。ギビンズはかう云つてゐる。

『十八世紀の終りから二十世紀の初めにかけて、イギリスの富は驚く程に増大した。然しその中、労働者の手に入るものは實に僅かで、大部分は大地主と新興資本家の手に這入るか、又は外國との戦争に費やされてしまつた。これは悲しむべき事實ではあるが、見逃してはならぬ事實である。』

富は雇主に絶大の權力を與へたゞけではなかつた。彼等は法律によつて、政府の機關を労働者を壓伏する道具にした。政府はすつかり富裕階級の掌中にあつたので、彼等は勝手に、自分に都合のいい法律を作つた。そして労働者からは、出來るだけ多くの利益を搾り取るようにした。

資本主義の勃興に次いで現はれたのは、資本の聯合乃至は合同とその組織である。これは今日も尙ほ、次第に激しく發展しつつある。新制度の下に、製造業は、一時盛んになつたかと思ふと、間もなくその間に競争が行はれ出した。大資本家は互ひに競争しだした。市場の奪ひ合ひが初まつた。この激しい競争の弊をさけるため、乃至はこの激しい競争に打勝つために、資本の聯合、又は合同が行はれるようになった。即ち多くの製造業者の手に集積せられた資本が、競争の作用によつて、少數の大資本に集中されるのである。

第三節 資本主義の發展

この恐ろしい資本家間の競争は、悲惨な犠牲者なしにはすまなかつた。競争に敗けた澤山の人々は、零落して賃銀労働者に成り下つた。けれどもこの競争制度は、社會の「自然の法則」と見做され、産業の能率を高め、國家の繁榮を計る上に、缺ぐべからざるものと思はれた。だから後になつて、大仕掛けな資本の聯合や合同が行はれた

すと、それは競争を緩和するからいけないと非難する者があつた。今もさう思つてゐる人々が尠なくない。然しこれは非科學的な考へ方だ。さういふ人は、資本主義的生産の本質と法則とを解せぬ者である。

競争は決して「自然の法則」ではない。企業をやつて行く一つの方法に過ぎぬ。競争者は競争によつて利潤が得られる間は、この方法を取るのだ。一體資本家の仕事は抽象的な經濟法則を證明したり、昔の辯證論者の論理を明らかにしたりすることではない。そんな七面倒臭ひことは眞つ平だ。彼等は金を儲けさへすればよい。彼等の仕事は金儲けだ。若し競争制度の下で金儲けが出来れば、それでよい。然し聯合した方が、それよりもつと金が儲かるとなれば、彼等は直ぐ聯合するまでのことである。競争が自然法則だの、聯合はいけなだのと云つては居られない。彼等は唯だ資本主義制度の作用に順應して行かねばならぬ。さもなければ滅びる外はないのである。

ところが、資本主義には直接、聯合を促がす三つの主な力がある。即ち

(一) 資本主義の下では、競争の傾向がいよ／＼烈しくなる。その結果、生産物の物價は下り利潤の歩合はますます／＼尠くなる。この埋合はせをするためには、生産高を増さねばならぬ。低い利潤の歩合で、澤山賣つて儲けねばならなくなる。斯うして、何處にもかしこにも、事業の擴張が起る。然しどの會社も擴張が出来るといふ譯には行かぬ。強大な會社は擴張が出来るから、益々強くなるが、弱小な會社は、それが出来ないから、次第にだめになつて、遂には潰れてしまふ。それは丁度、手工業者が、最善の機械を備へた組織的な産業の前に、一たまりもなく消滅したのと同じである。小企業は大企業の前に倒れて行く。大企業だつて孤立してゐては、遙かに大きく、よい機械と組織を持つた大會社には降伏せざるを得ぬ。

事業の單位が大きくなればなるほど、競争の度は烈しくなる。大資本家と雖も

孤立してゐては、この烈しい競争に堪えられぬ。そこで彼等は聯合や合同によつて、之に打ち克つて行く。かうして聯合の必要は自づから湧いて來るのである。

(二) どの産業の部門にも、資本主義化の程度が進んで來る。其の結果としてどの産業部門にも、利潤のみを目當に、無暗に自ら生産する。かうして或る産業に關連するすべての工場が、どん／＼生産を續けて行くと、やがては生産過剰となる。市場には商品が溢れる。價格は暴落する。恐慌が來る。そうして多くの者が破産する。この惨害を避けるためには、事業家は聯合して、その産業全體を出來るだけ統一しなければならぬ。利潤の薄い工場は閉鎖しなければならぬ。そして確かに買手の見込のある分量だけを生産する。さうすれば、需要供給との關係がうまく調和して、生産過多といふことも起らず、従つて恐慌に襲はれることもない。勿論資本主義の下では、斯ような完全な調和は得られない。否な却つて不調和と矛盾は益々甚しくなつてゆく、けれども此の不調和と矛盾を避けようとする努力

は、やがて資本の聯合や合同を促進する。

(三) 事業家は、不生産的な競争に、莫大な費用を投じなければならぬことを、實際の経験から知つて來た。例へば廣告には澤山の金がかかる。この費用を省いてそれだけ利潤の方へ廻はすためには、聯合して競争を避ける必要がある。

斯ようにして競争制度は、すべて進歩した機械的工業には、次第に衰へて來た。數年前までは、市場に於ける公平と、機會均等とを叫んで、競争をやつてゐた事業家も今日は、聯合や合同の利を説いてゐる。そして謂ゆる『無駄の多い、厄介な、不必要な競争』の壓迫から脱れることをすゝめてゐる。とは云へ、資本主義の社會には、競争と競争から起る弊害が爲に減じて居ると思ふなら間違ひである。「今までは澤山の資本家、澤山の工業家が競争して居つた。この競争のために資本の聯合や合同が行はれた。今度はかうして聯合や合同によつて集中した少數の大資本の間に競争が行はれる。そして大資本の間の競争は、小資本の間の競争よりも一層猛烈であり一層悪性で

ある。例へば從來の小資本家同士の競争では、値段を安くすることが唯一の武器であつた。ところが一國の大資本と他國の大資本との間の競争には、大砲や潜航艇や毒瓦斯が用ひられる。今日行はれる國と國との間の競争は、すべて一つの例外もなく集中された大資本と大資本との間の競争なのである。

經濟状態は世界を通じて、急速に一律なものになつて居る。曾てはアメリカ合衆國にのみ特有とされてゐた産業の集中化は、自由商業の國イギリスにも行はれてゐる。即ちイギリスでも、鐵道や船舶等の料金は、大會社の協定で定められ、大會社は徐々に小さい競争者を併呑しつゝある。

織物業の方面では、十三部門に聯合が行はれ、二百九十六以上の會社が合同して、三七、五〇〇、〇〇〇磅の資本を有する一團となつた。石炭業でも合同が初まりかゝつてゐる。大會社は次第に小會社を併呑してゐるし、ロンドンやブラッドフォードの小賣業者は、既に聯合してゐる。鐵及鋼鐵業方面には、巨大な數ケの合同が行はれ、生

9

產品の價格は協定によつて決められるから、可なりうまく平衡を保つてゐる。壁紙、ポーランドセメント、礮砂、櫛、ゴム、油、菓子等の工業方面では、聯合は非常によい成績を示してゐる。銀行業、保險業も同様集中の傾向を現はしてゐる。先に十三の競争者に分裂してゐた帝國煙草會社は今日は、一五、〇〇〇、〇〇〇磅の資本を以つて經營されてゐる。

第四節 國際資本主義

「資本の集中と流通は一國の範圍内のみに限られぬ。既に各國資本家の間には、多くの國際的な協定が成立してゐる。そして經濟新聞は日々に、その増加を報じてゐる。利潤や利子には、愛國的な感情は微塵もない。儲かりさへすれば、何處へでも出掛けて行くし、誰とでも握手する。アメリカの鋼鐵王は、ヨーロッパの鋼鐵王と會合して、聯合を謀つてゐる。イギリスの資本は殖民地やその他の國に投せられて、その地の産

業を發展せしめてゐる。これは本國の産業と競争するためである。アムストロング會社は、日本に三百の社員を派遣して、造船術を教へてゐる。これはやがて日本に船艦用の材料を賣り付けんがためである。又イギリス人はロシアに行つて、鐵工業と織物業とを起さうとしてゐる。イギリスの織物機械製造業者は、世界の各地に機械を送つてゐる。之はイギリスの織物市場を作るためである。かの巨大なホルデン織物會社はフランスのランスやルーベに工場を設けてゐる。この地方には、資本家の謂ゆる『うるさい不公平な』工場法の制限がないから、彼等は賃銀の安い女や子供を自由に使ふことが出来るのだ。

アメリカやアフリカあたりでは、白人の監督の下に、黒人や黄人種を使つてゐる。彼等は賃銀が非常に安いから、白人の勞働者を驅逐するのである。かうして利潤追求の前には、愛國的な、民族的な、人種的な絆は譯もなく絶たれてしまふ。實に資本は非人格的である。國際的である。そして資本の聯合は、決して一時の變則ではない。

利潤の前には、資本は國境をも越え、人種の隔てを越えて聯合する性質を持つてゐる。有機的な一會社の下に、巧みに結合された企業では、出来るだけ不生産的な事を止めてしまふ。例へば或る程度を越えた廣告なんかは止してしまふ。小資本家のやるよ
うな、危険なあての無い生産はやらない。不安な個人的製造業には附きもの、無理
算段や無駄な骨折もやらない。

「かうして出来上つたトラストは、市場全體の状況を知り、廣大な世界の需要を熟知
することが出来る。」そしてその勝つた立派な組織によつて、競争制度に伴ふ危険や
浪費を避けることが出来る。

このトラストに現れたような産業組織は、將來どうなるだらうか。それに就いて、
今日多くの奇妙な、時には途方もない豫言が行はれてゐる。併し人類は常に古い經驗
を土臺として、更によき方面へと進歩して來た。そして混亂と無政府の中に組織を打
ち建てつゝ進んで來た。この事實を思へば、トラストの發展も必ずやよりよき産業の

組織を生み出すべきものに相違ない。それは少數の資本家ではなくて、社會の全員が
利益を得るような制度を作り出すに相違ない。

かくて十九世紀の初めに榮えた自由競争制度は今や既に滅び去り、全く趣きを異に
する原理の上に立つた新らしき制度が、吾々の眼前に展開しつゝある。

第五節 十九世紀の初めに於ける政治と經濟

産業制度の變化ほどには眼立たぬが、經濟制度や社會制度に關する新らしい學説が
現れて、一般に普及したことも見落してはならぬ。産業革命前のイギリスの經濟的、
政治的、社會的制度はなほ極めて中世的であつた。社會の不平等に關する見解も、
世の創めから決められた神聖な制度であるといふ、古い考へが支配して居つた。イギ
リスの政治機關はすべて、國王と、大地主と、大商人階級の掌中にあつた。今日吾々
が考へるようなデモクラシーの思想は、未だ政治上に現はれてゐなかつた。その頃は

五百人中、やつと一人位しか、投票権を持つてゐなかつた。第一、田舎の町は、田舎の貴族階級の支配の下にあつたし、議員を出すような町は、大抵、貴族の領地であるか、又はその支配の下にあつた。その上富庶な支配階級は、公然賄賂を用ひて自分の目的を達してゐた。この事に就いて、タヌエル・ラングミードは次の如く云つてゐる。『一八三一年、検事は、ブート郡の選挙の際に行はれた未だ耳新しい事を述べてゐる。ブート郡には一人しか選挙人がなかつたが、そのうち郡内の居住者は、たつた一人であつた。その人は郡長と選挙執行者とで集會を開いた。そして自ら議長の席に就き、動議を提出して、彼を選挙すべきことを謀つた。それから可否を投票に問ふて、まふと自分を選挙してしまつた。』

こんな調子で選挙が行はれてゐたのである。

一般の民衆は、ちつとも自分の地位に對する疑ひを起さず、みんな神様のお指圖だと信じてゐた。そして黙つて貧窮と隷屬の中に生活し、おとなしく自分の仕事をして

死んで行つた。

經濟思想も同じく中世的であつた。世界は動き出してゐたが、立法者も、行政家も、産業の指導者も一七六〇年代の事實を知らずにゐた。古い父權主義や國家干渉主義は、矢張り便利で望ましいものと思はれてゐた。名義上は自由であつた農夫や労働者も、實際は無智で貧乏なために、領主の奴隸同然であつた。古い國家説は、この固定した社會組織に、よく合ふように出来てゐた。國家は極端に個人の生活に干渉した。政府の役目は、個人の一時的な幸福や、精神的及び物質的幸福を保護するもの、特にそれが特權階級の利害と衝突しない限り世話を焼いてやるものだと思はれてゐた。古い經濟思想の影響で、賃銀も亦た、時の權力者が規定した。彼等は又、品物の品質から、時には分量にまで干渉したものである。そして是等の事柄は、皆な彼等上層階級の利害を中心として割り出されたものだから、なか／＼容易には滅びなかつた。が遂に産業革命の暴風がやつて來て、その急激な廣大な運動によつて、片つ端から破壊してし

まつたのである。

昔は生活が單純で、人と人との、社會的な産業的な關係も極く簡單であつた。規定を作つたり、取締つたりすることも、案外樂な仕事であつた。然し新らしい制度が現はれると共に、生活は複雑になり、人と人との關係も込み入つて來た。その結果、古い時代の制度や規定は、到る所で自由な工業や取引の邪魔になりだした。トインビーは此の邪魔になつた拘束を、次の如く分類してゐる。

(一) 國內産業の拘束

(イ)、エリザベス朝に法律となつて現はれる頃には、どの職に従ふ者も、七年の徒弟期間を終らねばならぬ規定があつた。

(ロ)、大概、どの町でも、定められた徒弟期間を終つた自由人でなければ、職人としての資格を與へなかつた。町は又、生産品の性質を檢查し、價格を公定した。

(ハ)、貨銀は大抵保安官の手によつて定められた。

(二) 對外取引の拘束

(イ)、外國貿易は東印度會社とかトルコ會社等、特に政府から許された會社の手のみに限られてゐた。

(ロ)、原料や生活必要品の輸入は獎勵されたが、外國の製造品を買ふことには制限があつた。

(ハ)、航海條令は、イギリスの商人が世界の貿易を支配するために設けられたものであつた。

『アジア、アフリカ又はアメリカの製品や農産物は、イングランド、アイルランド、若くは植民地に輸入することを禁じた。但しイギリスの臣民に屬する船にして、その乗組員の四分の三がイギリス人なる時は、此の限りに非ず。その他の國の製品は、

その國に屬する船か、又はイギリスの船に依らねば輸入する事が出来ない。』

斯ように産業革命の初め頃には、商工業及貿易の各方面に亘つて、七面倒臭い制限があつた。そのために自由な發展が妨げられた。一方、民衆は政治的に束縛され、政治は中世的な干渉主義で行はれた。ところが機械の發明と共に貿易と商業とは驚くべき膨脹をして、この古い中世的な、せゝこましい束縛をぶち破つてしまつた。國家の機關や産業の制度に關する、貴族的な神權説めいた考へは、ぐらくと崩れた。かくて社會は無拘束な、個人主義の混亂の中に投げ込まれた。古い法律は、遽かに勃興した廣大な商工業を取締ることが出來ず、さりとて新しい制限が生れるほど、そんなに時日が立つてはゐなかつた。それ故謂ゆる『産業王』が土地や資本や労働者から、どんなに澤山の利益を搾り上げて、誰れ一人咎め立てをする者はなかつた。のみならず當時の有力な經濟學者は、之を支持をするような學説を唱へてゐた。

個人の自由といふのが、この時代の合言葉であつた。猫も杓子も、個人の自由を熱叫した。然し産業革命の前まで勢力のあつた古い拘束主義、干渉主義が、どんなに馬鹿らしいものであつたかと云ふこと、そして之に代るべき新しい國家的管理の原則が末だ生れてゐなかつたことを顧みると、この個人主義の叫びも無理からぬことと思はれる。この自由主義の法理論によれば、國家はたゞ受動的な警察官にすぎなかつた。政府の役目は、最小限度に縮められた。そして労働者も雇主も、自由勝手に、賣買をしてよいといふことになつた。

社會的拘束、貴族的拘束の信條よりの解放、拘束と制限からの自由、之が新時代の特徴であつた。

古い法律や、習慣や、社會制度は、殆んどみな壞れてしまつた。イギリスは到る所、過去の腐つた殘物で一杯になつた。政治は全て階級支配と寄生蟲を食はすために用ひられた。産業革命の進行するに伴れて、全ての古い法律、習慣、諺、格言、お伽噺などは、どしどしすたれて役に立たなくなつた。その上、人口が急に殖えたので、有ゆ

る豫算が狂ひ、色々な手筈が狂ふて來た。そしてとう／＼誤つた生存競争の教へを生み出した。『早いもの勝ち』——これが國民全體の社會的信條となつた。人は誰でも自由の道を切り開かねばならぬ、他人の事はどうでもよい。これが當時の哲學であつた。適者生存、弱肉強食が、謂ゆるキリスト教國のモットーになつたのだ。功利主義は新しい社會觀として一世を風靡し、兎にも角にも『この世でも、あの世でも、自分と家族の者だけは幸福に暮せること』が一般イギリス人の理想となつた。

第六節 新制度の下に於ける労働者の状態

資本主義は議會の法令で自由に解放され、輿論の制肘など少しも受けなかつたから、思ひ切つて自由な契約と、無拘束な競争の時代に飛び込んだ。そして人々は、富を作ることに向つて無茶苦茶に突進した。そのため氣の弱い悲觀論者や懷疑家は、すつかり人間に愛想をつかして、人性は卑賤と私慾の塊りだと論じた。

労働は市場で賣買される一個の商品となつた。金を儲けることが一切萬事で、生活状態なんかは、どうなつてもよいといふ調子であつた。その適例として、工場に於ける労働者の生活を簡單に述べて見よう。

既に述べたように、古い家内工業の時代は去つて、『小屋の戸口で絲を紡ぐ呑氣さ』は詩人の夢となつた。そして組織的な労働者の大軍を擁する、工場制度がやつて來た。大工場の建物は、衛生の事なんかちつとも意に介せぬ人々の手で、どし／＼建てられた。ランカシャ地方を旅行すれば、なほ當時の古い工場の建物が、澤山眼に映る。それは天井が低く、窓は小さく、衛生の設備と云つたら皆目ない有様である。唯だもう無暗に金儲けの事許り考へてゐたので、機械が廻る場所と、それを扱ふに足る光線さへあれば澤山だといふ調子であつた。

この汚ない建物の中で、塵に塗みれ、過度の労働に疲れ果てながら、イギリスの自由民は、契約の自由の有難さを骨身にしみて味つた譯だ。

ラドクリフはかう云つてゐる。

『古い納屋や家畜小屋や、ありとあらゆる外屋は修繕された。窓もきちんと入れ替へ、すべての様子を織物業工業にふさはしく作りかへた。かうした急造の織物小屋が、到る所に立ち並んだ。』

謂ゆる『イギリスの偉大な基礎を据えてゐる産業王』たちは、職工の精神的肉體的幸福とか、健康とか、危険な機械に對する豫防とか、道徳的な規律とかいふことに就いては、ちつとも考へなかつた。金儲けばかりが、彼等の全てであつた。新しい『労働を省く機械』も、それを動かす労働者には、ちつともありがたくなかつた。それ所か、却つて彼等を不幸にすることが分つた。新らしい機械が發明される度びに、人手が要らなくなつた。その都度、労働者は解雇の憂目を見なければならぬ。そして仕事が出来るまでは手をつかねて、飢えを忍んでゐなければならぬ。

無拘束な資本主義の下に於ける工場労働者の悲惨は、アメリカの黒人奴隷以上であ

る。若し一人の職工が飢え死するとか、機械で怪我するとかしても、雇主には一向痛くも痒くもない。彼は法律上、その責任を負ふ必要もなく、やめた職工のあと代りとしては、どんなに低い賃銀でも甘んじて受けるといふ連中が、數千人も彼の戸口で待つてゐる。彼は何時でも、この中から補充を求めることが出来る。ところが黒人の奴隷になると、その身體は主人にとつては大切である。若し奴隷が飢えたり怪我をして、働き手としての力が減るようなことがあれば、主人はそれだけ損をしなければならぬ。何故ならば奴隷は彼れの財産の一部であるから、働いてくれないと因る。彼等を食はすだけのことは否やが應でもしてやらねばならぬからだ。

この頃の報告や、決議文や、個人の記録や、議會の記録書等を見ると、とても今日の讀者には信じられないほどの、怖ろしい非人道な取扱ひのことが、色々と物語られてゐる。實にフランス革命當時の恐怖時代にも優る恐怖時代が、五十年あまりの間も、表面は平和な産業進歩の蔭に、引き續いてゐたのである。それは眞に長い間であつた。

然も世間からは冷淡に取扱はれ、剩さへ當時の經濟學者やキリスト教の牧師達は、この状態を辯護してゐたのである。

一七九五年、エイキン博士は、早くも機械の發明に伴ふ労働者の悲惨を指摘してゐる。彼は労働を省くための機械の發明は、事業を擴張したばかりでなく、有ゆる方面からの人手を工場に引入れたこと、殊に綿絲工場には、少年労働者を用ひるようになったことを語つてゐる。工場の持主は、貧民の監督官と打合はせ、貧民を検査して、一番おとなし相な、身體のしかりした者を選び抜いた。そして工場に連れて来て、機械の奴隷のように無暗に使ひこなしたものだ。當時は、人間の賣買を商賣にしてゐた者さへあつた。彼等は工場へ送る貧民の、仲買人をやつてゐた。子供なんかさ、かうして工場經營者の手に渡るが最後、『彼等はもう、主人の思ふままであつた。名義は徒弟であるが、その實、奴隷に過ぎなかつた。賃銀なんかは固より渡さない。あたり前に食べさしたり着せたりするのさへ、勿體なかつた。何故ならば、彼等は非常に安い

し、何時でもその埋合はせが出来るからだ。』

これ等の小さい奴隷たちは、晝夜交替で働らきつめた。夜が來ると、晝中寝てゐた一組がのこ／＼出て來る。その跡へ働らき疲れた一組が、積み重ねたぼろの中へもぐり込む。だから床の冷える暇がない。議會の報告をよんで見ると、一日に十遍も撲り倒された子供がある。暑い硝子工場で働いてゐる子供が、過ちをしたり、少しでも監督の云ふことを聽かないと、鐵の棒で撲られた。五歳にも足りない子供が炭坑で働いてゐたり、ビン工場では、五歳の少年が一日二十時間、働き通してゐたりした。

大人の労働者も、之に劣らず残忍に働かされた。男も女も、力の及ぶ限り、何時までも働らかされることがあつた。彼等は力盡きて倒れるまで、こき使はれた。衛生の設備と來たら、お話にならぬ。病氣や不具になることは、あたり前であつた。一八三三年の議會の報告には、労働者の不健康の原因を次の通りに分けてゐる。

狭い所に幽閉されること、蒸し暑いムツとする空氣、肺臟の中へ色々な汚物が這入

ること、絶えず立つてばかりゐること、特に濕氣を興へた空氣のうちで作業する紡績工場で、身體や足が始終ぬれてゐること、急いで飯を食べること、急に熱した場所から冷えた所へ來ること、機械の故障から起る椿事、微毒の感染、一般に清潔でないこと、冬は閉め切つた室に瓦斯ランプを用ひること、肉體の労働が生計を得る唯一の方法であつたこと、始終緊張して注意を集中しなければならぬこと、等。

尙ほ、同じ報告は、次のように述べてゐる。

『吾々はよく工場の少年や青年が、奴隷のようにこき使はれ、打たれるのを聞く。それから病氣や不具者は、唯だ工業地方のみにあること、そこでは人々は野獸のように、汚ない小屋に詰込まれてゐること等を耳にする。更に少女や婦人が、眞暗な炭坑の底で働いてゐること、馬の行けない所では、彼等が石炭の車を引つ張つてゐること、しかも牛馬のように綱をつけられて、暗い地下道を匍ひながら引いて行くといふ恐ろしい物語を聞く。到る所、残酷と壓制が充ちてゐた。職工は飢えと解雇とに脅やかされ

て、止むを得ず主人の命令を果す憐れな奴隷に過ぎなかつた。』

一八四二年、或るマンチエスターの人が次の如く書いてゐる。

『私はまだ憐れな幼年工を見たことはないが、此の惡むべき制度（工場制度）を見ると、自づから、人間の家庭に惹き起された不幸を考へずには居られない。工場は楽しい家庭生活を破壊してしまつた。十二三年前には、私はよく手織屋のうちへ行つたものだ。彼等は皆な幸福で満足してゐた。彼等の小屋は、氣持のよい家庭であつた。彼等には充分休養の時間があつた。庭園には野菜を植えたり、そこでみんなが遊んだりした。然し今はどうであらう。彼等が住んでゐる地方には、數多くの工場が出來て、恐ろしい機械が廻つてゐる。そしてどの家にも、貧乏と不幸と不満足とが巢喰ふてゐる。』
種々の材料から集めたこの斷片を見ても、この新らしい工場制度に法令や輿論や労働運動の壓迫が少しも加はらない當時の、不幸な職工の状態が偲ばれる。そして今日の資本家階級の巨大な資本は、斯ような無拘束の搾取によつて蓄積せられたものな

である。この無拘束を指して自由と呼ぶ。

第七節 人口の増加、新らしい都市

工場制度が現れてから、労働者の生活は非常に變化した。それと同時に、國民全體の社會生活が、著しく變化した。之は人口が殖えたのと、移動したのと、新たに工場都市が起つた爲めである。

イングランドとウェールズの人口は、一七七〇年から一八〇〇年までに、一、九五九、五九〇人、増した。之は二割七分強の増加である。それから一八〇〇年から一八三〇年までには、五、〇二七、二〇七人、即ち、五割六分五厘の増加を示した。産業革命前から人口は南部より北部へと、移動してゐたが、機械の發明と共に、北部に起つた産業の發達によつて、この傾向は急に強くなつた。北部には相次いで大工業都市が勃興した。そして國民の社會生活は、その爲めに、急に烈しい變化を受けた。

手工業時代のように、人々が自分で道具を持つて仕事をしてゐた頃には、莫大な産業軍の必要もなかつた。みんなが小さい仕事場で、離れ離れになつて、僅かの手仕事をしてゐた。蒸汽力が運輸に利用されない前は、手工業者の群れは、互ひに孤立して居つた。そして大概、自給自足の經濟を立てゝゐたから彼等の知識は、特に自分の職業に關する事や、直ぐ近隣の村のことにのみ限られてゐた。彼等の家庭はバラ／＼に散らばつてゐて、工業の片手に農業をもやつてゐた。

ところが機械の發明と共に、産業の専門化と組織化の時代がやつて來た。手織り者の絲車や手織機は廢れた。仕事を失つた連中は、新らしい動力機械を持つた工場に押し掛けて來た。資本家は間もなく大工場の有利なことと經濟な事を知つた。彼等は大規模の生産の有利なこと或る産業に屬する有ゆる部門を一箇所に集中することの得策を知つた。大工場は庇を並べて建てられた。その周圍に、イギリスの自由人に貸すために、幾千の安つばい小屋が忽ちむらがり立つた。

『必要は發明の母』と云ふが、十九世紀の初め頃までは、今日のような工場町も大都市もまだ無かつたから、衛生學は殆んど發達してゐなかつた。従つてその頃建てられた工場都市には、これといふ衛生の設備もなかつた。これ等の巢窟は『小屋』と罵られてゐたが、それを建てた資本家は、何もその中に住む必要がなかつたのだから、随分無責任な建方をした。請負人の問題はたゞ『人間が住むのに、あんまり見つともなくないやうに、又あんまり不愉快でないやうに、どうなりかうなり、練瓦漆喰や葺石を寄せ集めて、家らしいものを作ればよいのだ』といふにあつた。だから相當な生活をするのに必要なだけの、美術的、衛生的、道德的の設備さへもなかつたのだ。

唯だもう金儲けが、人生の目的であつた。健康な高尚な幸福な人間を作るなどいふことは、すっかり忘れられてゐた。でもなければ、二三の精神主義者に一任されてゐた。その連中は、寧ろこの世が地獄になることを望んでゐた。そしたら人々は覺醒して非行を改めるであらう、金儲けを棄て、神様のことを考へるだらう、と思つて

ゐた。

新らしい工場制度の下では、職工は市民ではなくて、商品の生産者である。しかも彼れ自身、市場で賣買される一商品に過ぎぬ。都市は愉快な居住地ではなくて、工場を中心であり、労働者の檻である。市民精神はまだ發達してゐなかつた。そしてイギリスの大都市では、今なほ發達して居らぬ所がある。市政の機關は、大部分利己的な方面に注がれた。

然し工業都市は次第に重要性を増して來た。そこに起る諸問題は益々複雑になつて來た。國民生活の中心は段々都市に遷つて行つた。で産業革命の特色の一つは、都市が田舎よりも重要になつたといふ點である。

人間生活に於て、都市は僅かに、田舎よりも重要な地位を占めて來た。一七六〇年代には、田舎の人口が全體の半を占めてゐた。其の後、都市と田舎の人口の割合は驚くべき變化をした。次に掲げるのは、その比率である。

都市の人口

田舎の人口

年	都市の人口	田舎の人口
一八六一年	六二、三(百分率)	三七、七
一八七一年	六四、八	三五、二
一八八一年	六六、六	三三、四
一八九一年	七一、七	二八、三

都市集中の傾向は、主として機械革命の結果であることは、機械工業の最も發達した地方の都市が、比較的によく人口の増大を示してゐるのを見ても明らかである。十九世紀の初め頃には、鐵道や電車の便がなかつたから、都市の人口過剰には、一層多くの弊害が伴ふた。運輸の便さへ完備して居れば、工場へ行くにも歸るにも、大して不便も感じない。そして廣く人口が散らばるから、強いて狭い所に多勢詰込む必要もあまりない。しかし當時の都市には、それがなかつたのだから、不便や混雑は一通りではなかつた。

多勢一所に詰めこまれて生活する結果、個人の生活や品性に及ぼす影響は、非常に深く且つ複雑であつた。今日のように、衛生の設備が完全で、醫學が進歩してゐても、都會に住む人は田舎に居る人よりも、生命が短い。その上病氣になり易く、身體が弱り易い。オーグル博士によれば、

『都市の死亡率は益々高くなる。その代り田舎からは頑丈な人々が絶えず入つて來る。この結果はどうなるか。云ふまでもなく、一般の人口が次第に悪くなるばかりである。何故ならば、比較的強くて精力のある部分が、他の部分より早く費ひ果されるからだ。強い部分は都市へ行く。そして早く死ぬ。かうして残るものは、弱小な考衰した人々だけである。之はまことに『不適者生存』の社會である。』

社會改良論者の或る者は、現代の都市生活の害惡をすべて機械工業に歸してゐるが、之は間違つてゐる。何故ならば手工業時代にも、今日の通りに、油を絞るようなひどい生活や勞働があつた。機械そのものが悪いのではない。金儲けを目的とする資本家

生産が悪いのだ。生産機關の私有を土臺とする搾取制度がいけないのだ。

吾々が悲しい労働の記録を讀むと、何時の時代にも、労働者は何といふ辛抱強い人々であるか、何故あんなにも辛抱が出来たか、といふことが不思議になる。そして彼等が時々爆發したのを咎める氣は起らないで、却つて彼等の温順に驚かされるのである。

第八節 進歩と貧乏

イギリスに産業革命が起らうとした一七八九年にはフランス革命が勃發した。バスチーユの陥落は古い制度の没落を意味してゐた。その陰氣な城壁は、古い時代の專制政治のかたみであつた。壓制者に對するフランス人の反抗は、初めはイギリスの進歩的な政治家や民衆に歓迎された。然し革命が進行して秩序が壊れ虐殺が行れるようになると、法律的秩序の子であるイギリス人は怖れをなした。

其後フランス共和國の挑戦的な態度と、明白な征服的野心とは、ヨーロッパ各國との衝突を惹き起した。イギリスも一七九三年に、色々な理由からその渦中に巻き込まれた。一つにはフランスの革命黨の宣言が、イギリスの特權階級には危険であつたのと、どんな犠牲を拂つても、世界に於けるイギリスの商業上の覇權を維持せねばならぬと考へたからである。それ以來、一八一五年にナポレオンをウターターローに粉碎するまでは、イギリスは高價な犠牲を拂つてヨーロッパの戦ひに参加してゐた。イギリスは直接、戰場には出なかつたが、八三一、四四六、四四九磅の戦費を出してゐる。

この間にイギリス國民の富は、驚くべき速さで増加してゐた。然し一般民衆の貧乏は、之にも劣らずひどくなつた。一七六〇年、貧民救助税は、一、二五〇、〇〇〇磅で、一人當り三志七片であつた。それが一八一八年には、七、八八〇、〇〇〇磅となり、國民一人につき、十三志三片を出してゐた譯になる。これを見ても、一般の民衆は機械の發明からは、ちつとも利益を得てゐないことが分る。

ギビンズは云つて居る――

『利益はすべて資本家たる製造業者の手に這入つた。そして一般民衆は、特に重い税を背負はねばならなかつた。何故ならば、日常生活に必要な有ゆる品物や食料に、税金がかゝつたからである。一八四一年になつても、なほ一千二百の品物に關稅がかかつてゐた。その上、小麥の價格は饑饉の時のように高くなつた。一七九三年には一クヲターにつき四九志二片であつたのが、一七九九年には六九志になり、一八〇〇年には一一三志、一八一〇年には一〇六志になつた。』

『これに反して、労働者の賃銀はどん／＼下つて來た。だから戦争の重荷は、主として一番貧乏な者の上に落ちて來た譯である。しかし貧乏人の貧窮は、取りも直さず、地主の富裕である。彼等は引つきりなしに地代を引き上げた。そして民衆の飢餓の上に益々肥つて行つた。彼等は議會を強制して穀物の價格を無暗に吊り上げたり、税金の重荷を一般民衆の肩に遷したりした。』

このイギリス労働者の歴史の悲しき時代に、經濟學者は何をしてゐたか。彼等は『人口過剩』や、『純化された利己主義』や、資本と賃銀の關係など、いふ問題を解くに忙しかつたのだ。ところが一般民衆は、幸にも自分自身で考へ初めたのである。彼等は何もなく、無拘束な産業上の個人主義は、決して幸福や、健康や、相當な生活状態さへも、齎らさないことを知つた。反抗の時代は近づいた。

第四章 自由放任主義に對する

反抗と新組織の芽生

第一節 労働者の境遇悪化、改善の障害物

新らしい個人主義の機械は、遠慮會釋もなく廻轉した。誰れ一人妨げる者もなく、自由自在にはね廻つた。その結果、有産階級は莫大な富を積んだが、労働階級の生活はどん底に落ち込んだ。然し何人もそれには氣がつかず、久しい間、社會は地主や資本家の横暴に任されてゐた。やがて人々は、追々と社會の實狀を考へるようになった。そして以前とは變つた、全く新らしい世界が展開されてゐることに氣が付きだした。かくて多くの人々が悲惨な労働者の状態に就いて、眞面目に救済の方法を考へるようになった。

然し人間は、直接自分の利害に關係のない事には、割合に冷淡で無頓着である。のみならず、色々な障害物があつて、この改良運動の妨げとなつた。

第一には、個人主義が猛烈を極めてゐた。そして謂ゆる『洗練された利己主義』は必ず新らしい産業制度に伴ふ弊害を、除き去るに違ひないと思はれてゐた。

第二には、フランス革命のやりすぎは、最も進歩的なイギリスの政治家をさへ、尻込みさせた。そして新らしい民衆運動の氣勢を殺いだ。

第三には、國內全體が、たゞもう生存競争の渦中に没頭して居つた。

第四には、ナポレオン戦争のお蔭で、愛國心が盛んに勃興した。そして窮乏の叫びを壓した。當時、こんなことが書かれてゐる。『凱旋祝ひの觀兵式やイルミネーション、死んだ兵卒の公葬、教會の感謝祭、かうした催しは、吾々を熱狂させた。そして不満を押へさせた。』

第五には、社會は一つの有機體であるといふ考へが、まだ人々の心に浮んでゐなか

つた。従つてこの考へを中心とする、新しい道徳が生れてゐなかつた。でも單純な固定した社會にのみふさはしい中世的な古い取引上の規定は、最早や、非常な勢ひで増大し複雑になり、そして分化して行く社會には、とても駄目だといふことが分つて來た。

第六には、そして他の何物よりも有力な障害は、工場主が氣狂ひのように、富を作ること熱中したことである。その結果、他のことは殆んど顧られないといふ有様であつた。

斯ように労働者の境遇を改善する上には、幾多の困難と障害とが横つてゐた。かて加へて色々な事件が、既に恐ろしい労働者の生活状態を、一層ひどくした。

第一には戦争が終ると共に生じた失業である。戦争が終つた爲めに、一八一三年から一八一六年の間に、十二萬人の水兵が解雇された。同時に多數の兵卒も職を解かれた。かくて、さなきだに不景氣で労働者過剰のところへ、急に多數の失職者が割り込

んで來たのである。その結果が労働者一般に取つて、不利な状況を齎らしたことは云ふまでもない。

第二には、貧民救助税で、給料の足りないところを補ふはせるような、愚かな法律があつた。その爲めに工場主は、遠慮なく賃銀を引き下げた。一方、労働者も、貯金をせぬようになつた。

第三には、戦争中は物價が非常に騰貴してゐたが、戦後は勢ひ落下した。そこで戦時の一時的な變則な需要をあてにしてゐた工業や農業は、非常な打撃を受け、そこに働いてゐた労働者は職を失ふようになつた。

第二節 經濟學者の態度

當時の經濟學者は、主にもアダム、スミス思想に従つて、個人主義を奉じてゐた。然し彼等はスミスの思想を、わざと誇張したり、こぢ附けたりして、急激に發展する

産業に、新しい拘束を加へることに反対した。彼等は中世紀の干渉主義の失敗と、その馬鹿らしさを高調し、再び起らんとする國家の干渉に反対した。彼等は強く『洗練された利己主義』の説を主張した。彼等は謂ゆる社會の『自然法』を發見したと稱した。それは自由な労働者を、永久に縛つておく法則である。そしてこの『發見』は資本家と工場主には最も歓迎された。

マルサスは社會の不幸を、人口の過剰に歸した。労働者の苦しむのは、賃銀が低いくせに無暗矢鱈に子を生むからだ。彼等の貧困は、不節制からである。自業自得である。マルサスは斯う云つた。だから社會は、その責任を負ふべき必要は毫しもない。貧民救助法なんかは、宣しく廢止すべしである。『我等は正義と名譽の名に於て、宣しく貧者の救済を拒むべきである。』そして、

『若し両親がその子供を棄てたなら、彼等にはその罪惡の責任がある。子供は社會にとつては、比較的價值なきものだから、社會は却つて迷惑する。』

彼等古典經濟學者の結論は、要するに『自然法』の萬能である。人間は社會のことに關しては、無力な憐れなものに過ぎぬ。彼はこの世の事は、何物をも變へることは出来ぬ。唯だく『自然』が自ら社會を導いて行くのである。人はその跡から隨いて行くだけのことだ。そして『自然』は最も弱い者を、飢えさせ、ふるひ落とし、惡魔の手に渡すのだ。貧乏人が苦しむのは社會の罪ではなくて、自然法にかなつてゐるんだから仕方がない。これが當時の經濟學者の態度であつた。

第三節 反抗の叫び

しかし事態は益々堪え難くなつて來た。國家の政治に關與し得ない民衆は、新制度の不正に對する長い間の憤りを、しばく一揆に爆發させた。彼等は稻叢を焼いたり、機械をぶち壊はしたりした。北部地方には、不満と不穩の氣が滿ち渡つてゐた。一八一九年に人身保護法と六立法とを廢止したのは、民衆の動亂を鎮壓するためであ

つた。これは政府が如何に驚き怖れたか、イギリスがどんなに無政府状態に陥入つてゐたかを示すものである。その上、謂ゆるピーターローの虐殺が起つて、民衆の激怒と社會の不安とは一層甚しくなつた。

個人主義が舊い經濟上、社會上、政治上の制度の殘物を破壊し、之を拂ひ除けた功績は、非常に價值があつたと云はねばならぬ。然しそれは一般民衆には、僅かな人生の樂しみさへも保證し得ないといふことが、間もなく分つて來た。

第四節 工場法の制定

この悲惨な状態を、この上辛抱することはとても出来なくなつた時、工場法を要求する運動が初まつた。しかし契約の自由といふ資本主義の下に於ける、神聖な權利を犯すまいとして、誰しも『息をひそめ、聲を沈めて』この問題に近づいたのである。契約に従ふといふ神聖な義務から見れば、人の生活位はどうなつたつてよい！ それ

ほどまでに、契約の自由といふことが重んじられ、之に干渉することは、人權を犯すものと考へられてゐたのである。

イギリスの工場法を促進したのは、妙な勢力であつた。即ち博愛論者や政治家の策士や、道徳的な社會的信條を持つた男女が、労働者に加擔して、彼等の境遇の改善のために戦つたのである。新らしい産業制度に法律の拘束を加へようとする試みは、一八〇二年に初まつた。パンフレットや報告書に記された労働者の悲惨な生活は、一般社會からは久しく注意されなかつた。ところが酷い病氣が、次第に工場以外の社會にも食み出すようになつて、初めて一般の人々は驚いたのである。長時間の労働、通風の悪い、汚ない、むさくるしい家庭、衣食の不足、衛生設備の全くないこと、斯うな事から工場地には、よく傳染病が流行した。そしてそのまゝ棄て、おいては一般公衆の衛生にも係はるといふところから、問題になり初めたのである。

一七九六年になつて、マンチエスター保健委員會が設けられた。マンチエスターの

文學哲學會の會長、パーシヴァル博士は委員會の席上で、次のような報告をした。
『保健委員會はその必要な事業を遂行するため、殊にマンチエスター及其の郊外にある大綿織物工場を視察した。こゝにその結果を公表して一般の鑑識を仰がうと思ふ。』

- 一、大綿織物工場に働く幼年労働者及び一般労働者は、非常に熱病に感染し易い。そして一度び感染するや、同室内に詰め込まれて働らく人々は固より、その家族及び近隣にまで、急速に傳染する傾きがある。
 - 二、大工場は一般に、その従業者の身體を傷ける。假令へ病因を持たない者も、虚弱になり易い。これは狭い所に閉ぢ込められたり、又は、空氣が熱くて、濁つてゐたり、或ひは運動が不足するからである。運動は幼年の時代には、身體を強健にするため、缺ぐべからざること云ふまでもない。
 - 三、夜業及び長時間の労働は、幼年に取つては、たゞにその身體を害するのみならず、國民將來の生活及び産業を害すること多大である。そは來るべき時代の精力を傷け、その幼芽を破壊するのみならず彼等の兩親の怠惰、放逸、贅澤を助長する。彼等は自然の命に反し、その子供達を苦しめることによつて、生活してゐるのである。
 - 四、工場に雇傭せられた少年は、教育及び道德上宗教上の訓練の機會を奪はれてゐる。
 - 五、或る工場には立派な規定がある。それによつて是等の害惡も、或る點までは除去されるであらう。是等の工場の持主は必ず吾々と共に、國會への請願に盡力してくれるであらう。吾々は是等の工場を取締る賢明な、人道的な法律の制定を國會に請願せんとするものである。かゝる法律以外に、この目的を達する方法はない。』
- その後工場労働者の運動によつて、一八〇二年に一つの法令が國會を通過した。この法令は、工場に雇はれた徒弟その他の、健康と道德とを保護するものであつた。こ

141

それは、主もに、ロバート・ピール卿の、長年の努力の結果、通過したものであるが、貧しい徒弟を保護するのが、その主もな目的であつた。之によつて少年労働者の労働時間は一週七十二時間に『減じた』そして夜業も可成なり取締つた。工場の近くに住んでゐて、通勤してゐる子供のことは此の法令では考へられて居らぬ。何故ならば彼等は両親の保護の下にあるものと決められてゐたからである。

子供は皆、讀方と書方と算術との授業を受け、一年に一枚の衣物を呉れることになつた。工場は年に一度は掃除をすること、適當な換氣法を講ずること、寢室は男女別々にすることになつた！ この生まぬるい法令を犯す時は、四十志以上五磅以下の罰金に處せられた！

然し工場主の利己的なのと、労働者が非常に無知だつたのとで、國會は思ひ切つた改良を施すには至らなかつた。労働者は、時間が短くなれば、賃銀が下がると云はれて、それを信じてゐたのである。織物工場の方面だけは、兎も角も貧民奴隷の賣買

が禁じられたが、幼年労働の恐ろしさは、少しも緩和されなかつた。國會は此の法令によつて、雇主と雇人とが、自由にその仕事を決める『權利』に對してほんとに干渉しやうなどとは考へてゐなかつた。社會に於ける生存競争は、社會の自然な状態である、といふ思想が一般に流布してゐた。それで衆議院の或る特別委員會の報告（一八一一年）にも次のやうな言葉がある。

『若しこの法令が、取引の自由、即ち個人の利益につき、最も有利なりと思はるゝ條件及び方法にて、その時間と勞力とを處理せんとする、完全なる個人の自由に干渉するやうな事があるならば、それは社會の幸福と進歩とに必要なる、最も重要な法則を破壊するものである。それは最も有害な先例を作るのである。そして間もなく、一般の不景氣を強め、一度び除かれた不景氣の原因を更に呼び起すものである。個人の自由こそ、最高最善の法則である。』

個人の自由がこのように高調され、資本家は自由自在に富を作ることが出来た。然

し民衆は斷乎として、最早や『死ぬまで汗を流し、悪臭に塗れて』苦役することを拒んだ。時勢は最早や労働條件を、一層酷しく取締る方面に向つてゐた。一般の輿論がやかましくなつて、資本家を制肘する時が来た。

一八一五年、ロバート・オウエンは産業制度の不正不義に對して、公然と反抗の聲を擧げた。彼は世界の労働者にとつては忘れ難き、偉大な尊敬すべき友であつた。彼に取つては法律の干渉は『經濟思想』の問題どころではなかつた。それは人間生活の大問題であつた。この頃、製造業者は、強い法の力をもつて、自分の利益を計らうとして居つた。彼等は、綿花にかけられてゐた税金の撤廢を、政府に建議しようとして居つた。そのために工場主の會合があつた時、オウエンもその一人として出席した。そしてこの機會を利用して、彼は労働者の權利を主張した。彼もその席上で、税金の廢止を唱へて非常な喝采を受けた。然し、工場主の中には誰れ一人として、彼が動議を出した労働者の地位改善の事には、賛成する者がなかつた。そこで彼は労働者のた

めに、熱烈雄辯に論じたてて、工場法の制定を主張した。彼れは斯う云つた――

『それでは吾々は、何の耻ぢる所もなく、たゞ吾々の事業を擴張するような法案の通過を要求し、一方吾が幾千の同胞の精力と幸福と道徳とを奪ふが如き状態を、何時までも棄て、置くつもりであるか。しかも之は吾々の事業に伴ふて生じた害悪なのである。それを除かうとはせず、このまゝに棄て、置かうとするのであるか。』

若し君達がさういふ意見ならば、私は、少くとも私だけは、この撤廢法案にも調印しないであらう。否、私はあらん限りの力を盡くして、この種の運動に反對する。唯だ事業の擴張のみを念とする者は、我國労働者の地位を、西印度諸島の黒人奴隸以下に突き落さんとする者である。成る程私は、綿織物業には深い興味を持つてゐる。又これによつて我國の政治的勢力が擴張せられる事をも、輕んずる者ではない。然しそれと同時に、私のイングリランド及びスコットランドに於ける長き經驗は、綿織物業が今日の狀態で行はれる限り、これに従事する労働者は耐ふべからざる苦痛を負はねば

K. M.
⑨

ならぬ事を、私に教へた。それ故、私は躊躇することなく叫ぶ。寧ろ綿織物業は亾滅せよ！ 若し我國の政治的優越がこの事業にのみかゝつてゐるならば、その優越をも棄てゝしまへ！ 人生に於ける最も貴きものを犠牲にしてまで、綿織物業を續ける謂はれないのである。』

オウエンは第二次の工場法の骨子として、次の三つの要求を擧げた。

- 一、十二歳以下の少年少女を、綿織物業のみならず、有らゆる他の機械工場に使用する事を禁ずる。
- 二、機械工場の労働時間は、食事及び休憩の時間を加へて、一日十二時間を出でざること。
- 三、少年は読み書き、算術の加減乗除、少女はその上に普通の衣物の縫ひ方、これだけの教育を経なければ、機械工場に雇ひ入れてはならぬ。但しこれは即時實行は不可能だから、或る期間を定めてしかる後實施すること。

オウエンは四年の間ロンドンにゐて、始終國會に出席した。そして有ゆる無知と偏見と私慾と個人的な中傷とに抗争しながら、この法案の通過のために闘つた。一八一九年オウエンの草案は見る影もなく削られて、やつとのことで通過した。そして兎に角、法律となつて現れた。この四年間の運動中、彼は種々の事柄を學んだ。彼の言草を用ひれば、『この法案が兩院の審議に附せられてゐた四年間、私は親しく議事に列することが出来た。そして彼等政治家の不誠實なやり方を知つた。また事業家や商人等は、その目的を達するためには、如何なる手段を取ることにも辭しないこと、彼等は實に無知で、俗悪で、私慾の塊に過ぎないことを知つた。實業界に高い地位を保つてゐる人々でもさうである。彼等はこの法案が始めて提出された時、有ゆる手段に訴へて叩き潰さうとした。そして、何でも無い理由をあれこれとくつけて、四年の間、下院に引きつけて置いた。その間も、どうかしてこの法案を骨抜きにしやうと試みた。』

この新工場法によつて、九歳以下の子供の使用を禁じ、九歳より十六歳までは、食事時間を除いて一日十二時間以上の労働をさせないことになつた。最初の法令では、政府はたゞ貧しい徒弟を保護するだけであつた。しかし一八一九年の此の法令は、一般に『自由な労働者と雇主との間に干渉する』ものであつた。だから反対者は之を罵つて、『無暴な極めて危険な、非立憲な新法』と云つた。

之は確かに、國家は弱小な人民の利害を保護しなければならぬ、といふ新思想の最初の現れであつた。これ以來、法律の拘束が次第に行はれるようになった。人は自分で自分の生活状態を決めて行けるのだ、といふ意識が次第に人々の頭に上つて來た。個人の發達とか救済とかいふ問題以外に、集團的でなければ解決出來ない社會的產業的問題がある事に、そろ／＼氣が付き出した。社會の自然法とか、個人主義とかは、だん／＼壞れかゝつて來た。

一八二五年には、土曜日の労働を短縮する法令が出た。工場法に違反する者の刑罰

も設けられた。然し是等の工場法も、職業なり賃銀なりの安定を保障することは出來なかつた。それに綿織物業以外の労働者は、少しもお蔭を蒙らなかつた。彼等の地位は少しも改善されなかつた。貧乏と、飢饉と、苦痛と、墮落とは、依然として一般労働者の受くべき遺産であつた。

不安の空氣はイギリス全土に擴がつた。民衆はざわめき出した。彼等は彼等自ら國會に出て、自分の権利を主張しなければならぬと感じだして來た。

第五節 民主々義の勃興

今日吾々が考へるような民主々義は、現代になつて發達したものである。前章にも述べたように産業革命の初まつた頃のイギリスの政治は、まだ中世的であつた。ジョージ三世は、その頃驚くべき権力を振ふてゐたが、それには次のような理由があつた。

第一に、名譽や特權や位階や地位を與へる權力は、すべて國王の掌中にあつた。そして慾深き政治家は、之によつて買収され、直ぐ國王の追従者になるものである。第二に、貴族の地位や特權などは、國王を離れては成り立たなかつたし、その生活資料や政治的勢力の大部分は、國王のお蔭であつたから、彼等は國王の云ふ通りになつた。第三に、そして最も重要なことであるが、衆議院そのものが、ちつとも一般民衆の利害を反映してゐなかつた事である。それ故、國王は無限の權力を振ふことが出来た。

何故衆議院が民衆と没交渉であつたかと云ふに、第一に、郡選出の代議士は殆んどみな、その地方の貴族に左右されてゐた。彼等は貴族の支配の下にあつた。第二に、代議士を選出する市邑は、大抵貴族の所有であるか、又はその支配の下にあつた。第三に、王族や貴族を選擧するために働いた人々は、政府部内の地位を與へられたり、名譽を與へられたりした。つまり人々はそんなもので買収されてゐたのである。第四

に、賄賂が公然と行はれ、『市邑仲買人』といふものさへあつた。之は選舉權賣買を稼業とする人々であつた。

十八世紀の終り頃には、衆議院には五百五十八の議席があつた。その中三百五十五人は表向き一萬五千票以上で當選したことになるが、實は政府の推薦か、または指名によるものであつた。そしてあとの百九十七人は、貴族や地主等國王の擁護者のみであつた。斯ような有様であつたから、彼の小ピットが、『この下院は、決して大英國の民衆を代表するものではない。それは名義だけの市邑や、荒廢し死滅した町や貴族や、金持ちや、外國の有力者を代表するに過ぎぬ。』と揚言したのも無理はない。

○ オリヴァ・クロムエルは既に一六五三年、議會の改革を企てた。彼は郡の代表者を増すために、リーズ、ハリファックス、マンチエスター等の諸州に代表者を出さしめ、小さい市邑は削つてしまつた。然しこの賞讃すべき改革も、スチユアート家が再び王位に即くに及んで廢止され、議會は再び、國王と、貴族と、大地主のものになつてし

まつた。その後、十八世紀の半頃からは再び議會改革の運動が起つたが、何の効果もなかつた。フランス革命の恐怖は深くイギリスの支配階級を恐れさせてゐたので、ナポレオンがセントヘンナに流されるまでは、眞面目に改革運動を取扱ふ者がなかつた。

議會改革運動に關連して忘れることの出来ないのは、イギリス急進主義の父と呼ばれたウキリアム・コベットである。一八一六年、彼はその雜誌『政界週報』を一志半片から、たゞの二片にしてしまつた。この安い政治雜誌のお蔭で、政治上の事は善惡となく、一般民衆に知れ渡るようになった。そして民衆の意識の中に次第に新しい思想を浸み込ませた。雄辯家や、詩人や、著者や、短文家は、一生懸命になつて労働階級の自覺を呼び醒ました。參政權の獲得を目的とするハンブデン俱樂部は全國到る所に設けられた。そしてこの運動はジョン・ラッセル卿の指導の下に、幾度びとなく議會に突つかゝつて行つた。かくて二度の失敗の後、一八三二年に、かの有名な改革法案が

とうとう國會を通過して法律となつたのである。この時にも、上院や、僧侶や、大學や、法學協會は猛烈に反對した。が兎に角、時勢は民主々義の方に向つて流れ出した。然しこの改革運動は、たゞ議會の中だけの戦ひではなかつた。全國に亘つて、強固な結社が出来てゐた。その人達は、政治上の特權が叩き壊されるまでは、斷じて活動を止めない決心を持つてゐた。第二の法案が上院で否決された時には、その報告を待ちあぐんでゐた大都市には、いきなり暴動が勃發したほどである。第三の法案が終に上院を通過した時にも、首相は威嚇し、國王は警告を發して之を阻ばまうとした位であつた。

兎に角この法案が通過して、中流階級は選舉權を握つた。彼等は、特權階級の牙城に肉迫することも出来るようになった。然し労働大衆は、依然として政治的には無力であつた。そして此の時以後の政治史は、この大衆の參政權獲得運動を中心として展開する。吾々はシドニー・ウエツプの意味深き次の言葉を覚えておく必要がある。

『然し新らしく選舉權を得た階級の代表者は、其の選舉人に特權を頒ち與へようとはせず、その捷ち得た權力を用ひて選舉民の利益を計らうとはしない。それ所かどの新しい政黨も、反對の政黨と競争するために、非常な危険を冒さねばならぬような羽目に陥入るのである。』

一八三二年の法令によつて、百四十三の議席は『朽ち果てた』小さい市邑から奪はれて、新興の中流階級の間分配せられた。

一八六七年、急進黨の運動と暴動は、保守黨内閣を壓迫して、市邑の家持ちと寄留人の一部分にまで、參政權を擴張せしめた。一八七八年には、借家人が參政權を得た。一八八五年には、農業労働者までが『獨立自主の』選舉人になつた。一八八八年より一八九四年にかけて發布された地方分權令は、地方自治の道を開いた。かうして過去百年の間に、イギリスの政治は、靜かな革命を遂げた。その結果、政權は次第に人民の手に渡つた。

第六節 産業的民主々義

過去百年の政治の歴史が、政治上の民主々義を中心として發展したように、その産業の歴史は、經濟的方面と社會的方面とに於て産業上の民主々義を中心として展開した。労働運動は二つの道を取つて發展したが、方向は一つであつた。即ち一方では、國民の立法部たる國會に迫つて、法律の力によつて地位の改良を計らんとし、他方では、各種の團體が協力して、思ひ思ひに、生活と労働の状態を改善しようとなつた。前者は政治運動であり、後者は労働組合運動である。

一八三二年の改革法案が通過した次の年には、參政權運動で暫らく忘れられてゐた工場法の問題が、議會に提出された。そして一八三三年から一八三四年にかけてすべての織物工業に適用される一つの重要な法令が出た。之によつて九歳から十三歳までの子供の労働時間は、一週四十八時間と定められ、十三歳から十九歳までは、六十九

時間に制限された。青年の夜業は禁じられ、絹織物工場では、少年の労働時間を一日十時間以内と定められた。此の法令は資本家及び工場主側からは、非常に猛烈に反対された。然し彼等は録にその條項に目を通してゐなかつたので、自信のある反対者は極く僅かであつた。

一八四二年に婦人及び小兒の地下労働は禁止された。有名な一八四九年の十時間法及び一八五〇年の補則によつて、婦人及び小兒の労働は一日十時間以内に制限された。ところが婦人と小兒の労働時間を短縮すると、勢ひその工場を閉鎖しなければならなかつたので、この十時間法はまた、男子にも適用されることになつた。そこで十時間の労働時間は、一般の工場で行はれることになつた。その後、今日に到るまでの間に通過した工場法、禁止法の重なものだけを擧げるとしても、それは中々容易な仕事ではない。それ故こゝでは、全部省略する。

兎に角、一度個人主義の堤が切れて、集團的な運動が起りかけてからといふものは

個人の活動の範圍を狭めたり、個人の利益を社會一般の幸福のために犠牲にするやうな法令が、次から次へと發布されたのである。今日は市有及び國有の問題が起つてゐる。そして時勢は明らかに、生産機關の公有を目標として進んでゐる。この戦ひは長く且つ困難であつた。そして今でも、民衆が生産機關を握ることに恐れを抱いてゐる者がある。しかし力は彼等のものである。彼等の知識と實力とが進むに連れて、彼等は前進するに違ひない。未來は民衆のものである。そしてベザント夫人の云つたやうに、『人類は決してへこたれる事はない。その上に建てられた信仰は、岩の上に建てられたやうなものだ。人類は今日夢みてゐるやうな、幸福な健全な状態へと次第に近づいて行く。そして詩人や理想家が歌つた最も美しい理想郷も、その時代の吾々の子供にとつては、もはや薄暗い弱い光りに見えるだらう。必要なのは勇氣だ、辛抱だ、確信だ。なかんづく確信だ。正義は最後の勝利者であること、人は先人の夢みた以上の事を、何時かは實現し得るものだ、といふ確信である。』

第七節 相互扶助

工場法の改正運動と共に、労働者の間には團結の力とその必要とが、次第に認められて来た。社會は孤立して相争ふものゝ集合であると思ふに及んで、經濟學者は、今や攻撃の的となつた。オウエン、カーライル、モーリス、キングスレー、ラスキン等の人道主義者は時には論理的ではないが雄辯な英語で、此の古い考へを彈劾し初めた。キングスレーの辛辣な次の言草には、この人達の立場がよく現はれてゐる。

『吾々が自然を研究するのは、たゞその下に座しておとなしくその命令に従ひ、自然が吾々を凍えさせ、飢えさせ、惡臭の中に死なしめるまゝに任して置くためである、吾々は自然に對して、指一本も染めることは出来ない。かく論ずる人は、よし自ら科學者と稱し、經濟學者と呼ぼうとも、吾々の眼には愚かな鷺鳥にすぎぬ。』

人類は協同して、生活の方法を決めて行くものだといふ考へが、學者の著述に現れ

たのは、可なり後のことであつたが、民衆の間には、早くから本能的な相互扶助の生活が行はれてゐた。そして到るところに地位の改善を目的とする組織が出来てゐた。

第八節 労働組合運動

十八世の初め頃にはまだ雇主と雇人といふはつきりした、階級はなかつた。商品の製造にも澤山の資本が要らなかつたので、勤勉な熟練した職工は、少し奮發すればやがては一人前の親方になれた。ところが産業革命と共に、生産には莫大な資本と大規模の機械とが必要になつた。それを持たない人々は、勢ひ他人に雇はれて衣食する外はなくなつた。そこで生涯雇人としての生活を送らねばならぬ労働者の大きな階級が出来上つた。それと共に中世ギルドの制度は壞れて、自由競争の世になつた。それから更に新らしい組織が生れるまでの混沌時代には、何一つこれを取締る原則がなかつたのである。

労働者は恐ろしく長い労働時間と、低い賃銀とで縛られたのみならず、互ひに援け合つたり、生活の標準を保つたりするために團結することさへ禁じられてゐた。居住に關する法令は、貧民に對して設けられたものであつたが、實際に労働者にも適用され彼等が仕事を求めて他の教區に赴くことさへ禁じられてゐた。一七九五年と一八〇〇年の法令は明白に、労働者が地位改善のために團結することを禁止した。フランスのスプレースはジョセフ・ヒューム及ゼイ・アール・マロツクと共に、猛烈に之に反對した。そして遂に一八二四年、團結禁止令を撤廢せしめた。然し續いて起つたストライキや暴動は、政府を震撼せしめた。議會は再び、労働組合の關係する一切の運動を違法とする法令を通過せしめた。

労働運動はチャーチスト運動及び穀物條令廢止運動の間に、一進一退しながら成長して來たが、こゝには一々これを述べる譯には行かぬ。然し労働組合が法律で認められたのは、やつと一八七一年から六七一年にかけてのことであつた。

最初、労働組合は自由競争制度を認め、議會に向つて二三の要求を試みたり、雇主との間に團體交渉を要求する位で満足して居つた。然るに後年になつては、産業の方面に於ける、國家の干涉に對して、著しく態度が變つて來た。當時、資本主義の基礎はまだ強固であつた。労働組合は、全體の労働者の五分の一をも包容して居らず、その上數萬の失業者は、街上でパンを求めてゐた。これでは逆も、強大な資本家の聯合に、立ち向つて行くことはむづかしいと感じた。そこで、労働組合大會は、議會に生活標準の保障を、求めるせが關の山であつた。然るに資本主義が愈々崩壞期に入つて、その基礎がぐらつき出して來ると、組合運動の態度と作戰も、漸次に變化して來た。労働者は直接政權を目指して進む様になつた。

第九節 協同組合運動

協同組合運動は労働組合運動とは違つて、競争制度の存續を欲せず、その正義と公

正とを否定し、利潤本位の生産を否定して成り立つたものである。協同組合は理論上では、利潤を廢して、勞働者を資本家と仲次商人の手から救はうとするものである。初期の協同組合は、四五百の賣店を持つて居たが、一八三三——三四年の間に潰れてしまつた。次には一八四四年にロチデールに起つた。之はロバート・オウエンの思想から生れたのである。ロチデールの先驅者等は、食料や衣服を賣る店を建てること、會員のために家屋を設けること、或る種の品物を製造すること、失業者や賃銀の安い者を、工業や農業に雇ひ入れること、生産力を適當に調節し、分配と教育と行政とを管理すること——などを計畫してゐた。運動は急速に發展して、七年の間に百三十の店が出来た。一八六五年には協同組合卸商協會が出来た。一八九七年には會員の數が一、五二一、二八八になり、資本總額は二二、九八四、八二五磅、賣店の數、一、八二二軒、賣上高五九、八八一、〇三九磅、純益六、〇〇〇、〇〇〇磅に達した。

會員の大多數は進歩的であつた。若し彼等の後繼者が大取引と配當の多いことに滿

足せず、この創設者の方針を守つてやつて行つたならば、確かに國民生活の向上の上に好影響を及ぼしたに相違なかつた。シドニー・ウエツプ夫人は斯う云つて居る——『協同組合は、英國の工業商業財政の或る部分に、民主的な自治制を導き入れた。これには相當の道德的訓練が必要であつた。吾々が眞に立派な民主主義に達する前には國民一般に此の道德的訓練がなければならぬ。協同組合はそれを作つた。だから協同組合は、道德的な改良者として、人類進歩の前衛に立つ者といふべきである。協同組合は出来るだけ自分の仕事を完全に擴張すると共に、その方法と經驗とを教區の行政や市政や、進んでは郡や國家の行政にまで應用しなければならぬ。かく確實に、徐々に民主的自治を進歩させることによつて、初めてロバート・オウエンの理想であつた産業の協同組合的組織を實現することが出来る。』

然しながら協同組合を完全に擴張するのには、多くの障害がある。低い賃銀で然も仕事の確かでない極貧者、數千の小賣人、小商賣人、なまけ者で贅澤な金持ち、かう

いふ人達は、勿論この組合には加入することは出来ぬ。事實今日の協同組合運動は、オウエンの理想たる、獨立的な自給自足の團體を距ること遠いものである。今のところ、組合員がその生活費を得てゐる競争的な社會に比してやつと張り合つて行けるか行けないかといふ状態にある。

要するに協同組合は、資本家による利潤の收得を廢止しようとする點では、正しい方向を指して居るものである。けれども資本制度の下に協同組合を發達させ、之によつて資本主義の經濟が、漸次に協同組合の經濟に變はると思つたら誤りである。協同組合は、資本主義が倒れたあとの、生産物の分配機關としては有力な働きをなし得るものである。けれども資本制度の下に於ける協同組合は、せいゝ組合員の生活状態を、幾分か緩和するだけであつて、それは利潤を廢止するものではなくて、組合員を利潤の收得者にするだけである。

第十節 結 論

十九世紀は驚嘆すべき時代であつた。その建設的な社會的傾向（個人的傾向に對する）は多種多様であつて、容易に叙述し盡すことが出来ぬ。この章に述べたところは僅かにその梗概に過ぎぬ。それはこの時代の精神が最も好く現れた二三の特徴を述べたに過ぎぬ。本章を通じて讀者に知らせやうとしたのは、新しい世紀の諸問題を取扱ふ場合に必要な知識である。そして、色々な題目を撰んで述べたが、要するにみな直接に生活と労働とに關係のあるものばかりである。この人類史上の最も驚嘆すべき時代を眞に理解するには、尙ほこの上に、教育の發達、科學の諸方面に於ける研究の結果、一般教養の進歩、各種の改革運動の目的及びその方法——などを研究しなければなるまい。その點から見れば、この章に述べたところは、實に斷片的なものに過ぎぬ。

研究の材料は山ほどある。問題は極めて混み入つてゐる。しかしこの複雑な、こんがらがつた、人間生活の中から、三つの主要な特徴を抜き出すことが出来る。第一は恐るべき労働状態と自由放任主義に對する反抗である。第二は、イギリスに於ける民主々義の勃興である。第三は、民衆が自分の生活状態を自ら管理する力を、次第に自覺して來たことである。

第五章 産業組織の問題

第一節 産業の發達と社會の混亂

中世紀のイギリスを今日のイギリスに變化せしめたのは、産業革命の發展と民主主義の發達とであつた。即ち一方には産業的進化があり、他方には政治的進化があつた。私は是等の進化のうち、二三の主なる點に就いて、簡単な説明をした。また『此の驚くべき世紀』を作り出した、驚嘆すべき機械の進歩や科學の進歩の一部分を述べた。それから人々が市場の景氣不景氣に煩はされず、生活と労働の標準を保つために打ち建てた、組合運動の發展をもかいつまんで述べた。

一見混亂してゐるかのように見える産業や、機械や、科學や、政治の中に、明らか

に共通した一つの傾向があつた。それは人々が、次第に環境を支配するようになって来たといふことである。歴史の進歩の中心をなすものは、此の支配の發達である。原始時代の人々は、自然の暴威に怖れ戦いて居た。後には僧侶や封建時代の暴君が恣まゝに人民を支配して居つた。人民は彼等の犠牲になつて、その云ふがまゝになつてゐた。ところで今日はどうかだらう。政治や、宗教や、科學が非常に進歩した。それに啓發されて、宗教上政治上の意見を決めるようになった。そして互ひに協力して、全ての物質的環境を支配するようになった。

この小冊子では、勢ひその梗概を述べるに止まつた。この他にも、云はねばならぬことが非常に多い。例へば、生物學や生理學の發達、その人間に對する實際的價値、化學と製造業、農業、衛生、健康との關係、外科術、藥品、犯罪學及び犯罪者精神病者の科學的な取扱ひ、冶金學、採鑛學、地下労働者の保健設備、點燈、暖房、動力電信、電話、その他百般のことに對する電氣の應用、下水の衛生と取扱ひ、及びその利

用、疫病の豫防、トンネル鐵橋の工事——等には殆んど手をつけなかつた。要するに是等の科學は、空間や、暗黒や、洪水や、飢餓や、疫病を征服する方法を示してくれた。

また一方、新時代に伴ふ、色々な社會化の勢力についても、殆んど言ひ及ばなかつた。電信、電話、印刷物、汽車汽船、その他、組合や協會や學校等は、個人に社會の事情を知らせ、社會の一員としての訓練を與へた。そして此の新らしい世紀の混み入つた問題を解決すべき知識と、經驗と力とを與へた。過去百年の間に、工藝技術の學校は、長足に進歩した。消費組合、労働組合、共濟組合、禁酒會等の運動、本や新聞や雜誌を安く民衆に提供する廉價出版、電信電話、ハガキ、安易旅行、教育運動——かういふ事はうまく導けば、きつと個人の社會的能力を増加するに違ひない。人の活動は、各方面に於て急激な革命を遂げた。科學的研究の結果は、忽ち澤山の發見をもたらした。個人や國家の相違とか特徴とかは、すんぐ消えて行つて、皆同じこと

をなし、同じように考へるようになった。全く吾々は、新らしい世界に住んでゐる。古い時代の目標は、ずつと遠くの方へ隠れてしまつた。哲學者や學者達は、まだこの新世界の意義を十分悟つてゐないし、一方民衆は、經驗と知識とが足りないから、まだこの世界に適應することが出来ないでゐる。

工場制度が、發達した結果、先づ第一に現はれた影響は、工場都市に莫大な勞働者群が集つたことである。イギリスの北部にはこの變化が最も著しかつた。大都市が魔術のようにどん／＼建ち並んだ。そして後には、急進運動の中心となつた。それに較らると富裕な人口の多い南部は、次第に勢力がなくなつた。鐵道や、電話や、郵便制度や、日刊新聞は、狭い孤立した地方氣質を破つて、廣い社會的政治的活動を喚び起した。國際的な取引も盛んになつた。そして色々な論争を惹き起したが、國際間の理解を進める機會は多くなつた。國際的な取引は、運輸と通信に大革命があつて以來、急に盛んになつたのであるが、國家主義も國際主義も、そのために影響を

受けることが多かつた。スペンサーは、その『社會學研究』の中に、世界の各部分が離れる事の出来ない關係にあることを、巧みに説明してゐる。

彼は斯う云つて居る——『物事の成行きを注意深く見てゐる人は、一度の食事の中にも、次のような複雑な關係のあることを發見するに違ひない。彼の食べるパンは、ロシアの小麥から作つたものである。牛肉はスコットランドから、馬鈴薯は中部の諸州から砂糖はモオリチウス諸島から、鹽はチエシニアから、薄荷はジャマイカから胡椒は印度から、ブドー酒はフランス若くはドイツから、乾葡萄はギリシヤから、密柑はスペインから、その他、種々の香料や調味料は、世界の各地から來てゐるのである』。

勿論、國際貿易は今に始まつたことではなく、ずつと太古から行はれてゐた。然し最近百五十年間の進歩は、遙かに今までの歴史を凌いでゐる。世界の各地が、益々頻繁に交通して來るにつれ、複雑な問題が起つて現代の經濟學者を悩ましてゐる。互ひ

に離れてゐた地方も、次第に關係を結び合ふようになり、その餘剰の生産物を處分することが出来るようになる。各國の人々は大都會の街道にでも市場にでも家庭にでも混り合つてゐる。そして狭い地方的な傳統は破壊されて、世界主義的な精神が發達する。人の思想の領域は度められ、小さい偏見は、有ゆる宗教と人種とに接觸して自然に破られて行く。

人は古い習慣に嚙ぢりつく自然の傾向を持つてゐる。また新奇なものや、急激な變化を嫌ふ傾向がある。それにも係らず、古い制度が廢れて新らしい制度の來ることを認めぬ譯には行かぬ。古い掟はめちや／＼に破られた。そして新らしい制度は、未だ初まつたばかりである。だから今のところ統一らしいものが見えない程混亂されかき亂されてゐる。世界の創始の暗黒の中に戦つてゐる巨人のように、社會の色々な組織は互ひに戦ひ合つてゐる。ある者は古い制度にかちりつき、或る者は半ば新らしい制度に目覺め、更に或る者は舊い制度を打ち破いて、新しい制度を打ち建てようとして

ゐる。しかも互ひに闘ひ合つてゐる。

第二節 經濟學の混亂

古典派經濟學の書物を見ると、どの本にも、富、資本、地代、利子、價值、生産、分配、消費、國際貿易などといふ章が設けられてゐる。然しどこにも、産業問題とか又はそれらしい事は、ちつとも書かれてゐない。産業問題といふような社會的な問題は、てんで取扱はれてゐないのである。個人の道德だとか、慈善だとか、節制だとかを書いた本は山ほどもある。然し個人の發展や救済の問題以外に、更に大きい社會的な問題があること、それは唯だ集團的な努力によつてのみ解決されると云ふことなどに就いては、誰も一とことも書いて居らぬ。産業問題は、個人的な問題でなくて、社會的な問題だ。それは社會的な集團的な方法によらねば解決することは出来ぬ。コントや、ミルや、デアキンや、スペンサーの著書には、社會が有機體であること

が説明されてゐる。社會は單なる個人の集りではない。個人は單に社會と云ふ有機體の生活を分けあつてゐるのみではない。彼は社會に踏み込んで活動することにより、その構造や作用や發達の方向に變化を與へることが出来る。これだけの考へは、一般に認められてゐた。然しその有機體の目的は何であるか、そこに達するには、どういふ方法を取らねばならぬか、かういふ點は、少しも注意されて居らぬ。この點を科學的に研究しようと試みた人は一人もゐなかつた。だから今日、社會的活動の指導を求め、める人が、謂ゆる『經濟學』と稱せられる無數の本や論文を讀んでも、少しも得る所はないのである。古典派經濟學個人主義經濟學には、そんな事は書かれてゐない。彼等は『如何にあるか』といふこと、即ち現在の事實を述べることにのみ努力した。彼等は澤山の材料と知識とを寄せ集めた。彼らは何故これを用ひて現在の狀態を解剖し、産業問題の何たるかを説明しないのか。階級の特權とか、既定の利益とか、政治的關係なんかを顧慮しないで、正義のあるところを主張すればよいではないか。そ

して『如何にあるべきか』といふこと、及び『如何にあるか』といふ現在の事實を土臺として、この理想に達する方法を、示してくれたらよいではないか。然し、彼等はそれをしなかつた。語るべき筈の者が黙つてゐた。だから眞面目な産業問題の研究者は、失望して彼等を去つた。そして自由主義、保守主義、肉食主義、土地國有論市政研究、禁酒運動、外國傳道、救世軍、刑法改正、心靈學、慈善運動といふようなものに關する無數の小冊子を片つぱしから讀んだ。是等のものは、多少の勇氣を以つて、社會問題産業問題を解決すると稱してゐる。或はその重要な部分の解決が出来ると云つてゐる。

かういふ混亂した中にあつて知識を求むる者は、全く面喰つてしまふ。そして色々の改良運動の基礎が、往々相反してゐるのを見て、問題は近寄ることも出来ぬほど混み入つてゐる、とても解決なんぞ以つての外だ、と云つて打ち棄てゝしまふ。従つて社會運動なんかは無駄な『空ら騒ぎ』だとあきらめてしまふのである。

第三節 社會問題解決の共通の根據

社會生活を健全なものにするといふ事は、吾々に取つて最も大切な問題である。吾々は最高の知識と最も明確な判断とを捧げて、この問題を研究しなければならぬ。然るに世に謂ゆる學者は、何をしてゐるか。彼等はこの問題のために有益な科學的な精密な研究をしてゐるだらうか。否、彼等の多くはくだらぬ神話や、怪物や、超自然的な龍を相手に、頭をひねくつてゐる。殊に有産階級の金箱から、月給を取ることには忙殺されてゐる。或る人は、社會問題なんてありはしない、と云つて、平氣な顔をしてゐる。或る人は健全な社會状態と云つても、これといふ標準がないではないか、と主張する。どんなのが健全な社會なのか、見當が立たないと云ふ。かういふ手合ひは全く駄目だが、自ら産業問題を解決すると稱する連中の中にも、形而上學的な、若くは神學的な假定から出發する者が多い。彼等は現實の問題を離れて、抽象的な空論に這

入つてしまふ。産業問題の研究や解決が、神の旨に適はうが適ふまいがそんな事はどうでもよい。聖書の中に書いてあらうがなからうが、問題ではない。吾々は唯だ現實の問題を處理すればよい。そしてその共通な根據を求めればよい。

第一、吾々が此の世にゐる限り、吾々が生物である以上、吾々には食物が要る、衣物が要る。それから家も持たねばならず、健康も保たねばならぬ。苦痛や貧乏や酷いなやましい心配から、自由になつてゐなければならぬ。第二には、精神的な満足がなければならぬ。人は愛や、喜びや、稱賛や、徳がなければ生きては行けぬ。又自然を征服する力や、世のために役に立つ能力がなければならぬ。つまり第一の仕事は、生活の必需品を生配し分配することだ。そして出来るだけ勞力を省いて、各人の健全な生活に必要な色々の物質的資料を與へることである。次には各人が、その心と頭とを豊富にし大きくする、あらゆる機會を與へることだ。そして彼と社會との爲めになる何かの仕事に、その全力を盡さしめることだ。何よりも先づ生活に必要なものを充分

興へねばならぬ。次にはその精神を生長せしめるような機会を興へねばならぬ。この二つは、社會問題の解決に缺ぐべからざる土臺である。

第四節 人間の生活

人は自然物に勞力を加へて、生活の必需品を獲る。この力は人間の手である場合もあり、自然の動力であることもある。いづれにせよ外界の事物に力を加へることによつて、食つたり衣たりする物を獲るのである。それは健康に適するものであり、身體の發達を援けるものでなければならぬ。人間が理想的な生活をするためには、(一)純潔な衛生的な食物を適當に取らねばならぬ。(二)健全な家と庭園と空地、道徳的にも身體にもよいやうなさつぱりした生き／＼した環境が必要だ。(三)健康の法則に注意すること、身體、食事、運動、睡眠等に注意すること、(四)社會は最も有効な衛生的施設をすること、(五)疫病退治、(六)犯罪者の矯正及びその根絶を計ること、(七)精

神的又は肉體的に慢性の病氣を持つてゐる者には、成べく子供を産ませぬこと、(八)子供の養育には特に注意を拂ふこと、(九)各人を強健にし、有益な生産的な仕事が出来よう、技術と知識を興へること。

是等の點に注意すれば、自然に健康な幸福な人間が出来上る。のみならず、人間は今日よりもずつと生産的になり、少しの精力を費やして肉體的慾望を満足させることが出来るようになる。身體が強くなるといふことは、一寸考へても望ましい。強い人は弱い人の仕事の二倍もする。しかも疲れを感じることも少く、氣持よく働ける。社會的産業組織の眞の目的は、働いたり遊んだりするのに少しも苦痛を感せず、却つて非常な歡びを味ふよう、強い健康な男女を作ることである。

第五節 農業と科學

農業が進歩すれば、第一に、土を耕やすのに機械を利用する。第二に、灌漑や排水